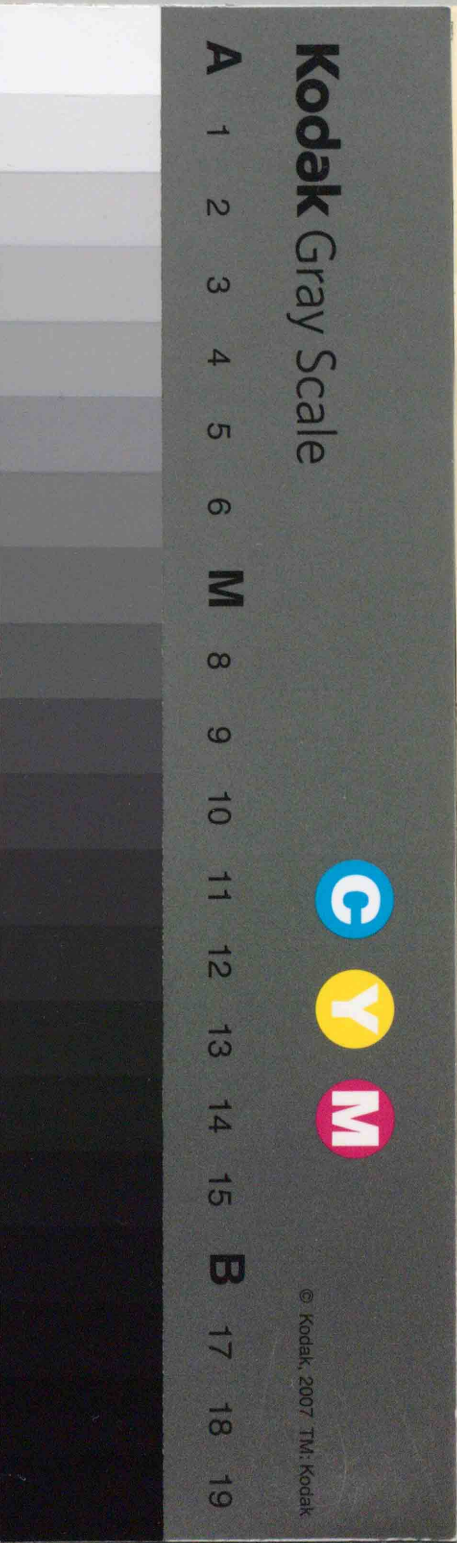
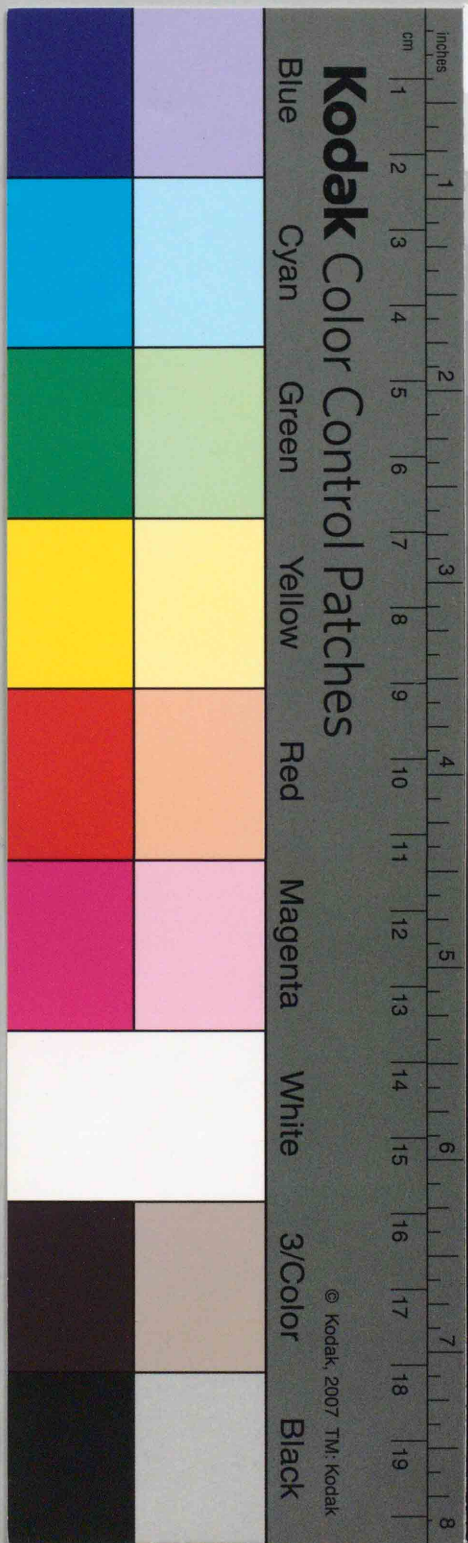




教
4
20



41735

教科書文庫

4
810
41-1926
20000 23819

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
810
41-1926
2000023819

資料室

375.9
Y019

文部省檢定
大正十五年二月十日
中國國語教科用科

吉田彌平編

中國文教科書

卷六

東京 光風館藏版

廣島大學圖書印



広島大学図書

2000023819



中國文教科書卷六

目次

一	自然の愛好	藤岡作太郎	一頁
二	詩二首	野口米次郎	六
	秋	山宮允	八
	泉	本山荻舟	一〇
三	畸人一茶	小泉八雲	一四
四	松江の曉	厨川白村	一六
五	小泉先生の舊栖		一八

目次

六	空行く雁	〔會我物語〕	四〇
七	會我兄弟	森 林太郎	四〇
八	天つ星	………	空
九	見知らぬ國	鶴見祐輔	七〇
一〇	西湖の遊	河東碧梧桐	七五
一一	佐那田餘一	〔源平盛衰記〕	八二
一二	雲の歌	七井晚翠	九三
一三	忘れ難き日	姉崎嘲風	一〇〇
一四	友に寄す	高山樗牛	一〇四
一五	紅葉山人の「鹽」	友枝照雄	一一二
一六	東京の顔	加藤武雄	一二三

一七	霧の倫敦	夏目漱石	一三三
一八	吉野の宮	北畠親房	一三七
一九	如意輪堂	〔太平記〕	一四三
二〇	早春の賦	阿部次郎	一四七
二一	千客萬來	………	一五二
二二	雪前雪後	幸田露伴	一五三
二三	仁和寺の法師	兼好法師	一五五
二四	僧正と賊	廣津和郎	一五七
二五	故郷の花	〔源平盛衰記〕	一五九
二六	平安京	藤岡作太郎	一六三
二七	平和の巴里	島崎藤村	一六八

二八 國民の抱負……………大西 祝 一九

青島大學圖書印

中國文教科書 卷六

一 自然の愛好

藤岡作太郎

慈愛なる母の懷アトに養はれたる子は生涯その恩愛を忘れず。日本ニの風土は國民の慈母なり。地味豊饒トクにして、河海に魚貝イセエの利多く、生活をして自由ならしむるが上に、優美ユウビ温雅オンガなる山川は常に臉上オモてに愛を湛シふるが如し。接する者はこれに親しみ、親しむ者はこれを慕シふ。愛に迎へらるゝ者は愛を酬ウケいざるを得ず。天然の大公園に棲む我が國民が、その一木一草をなつかしむは自然の情なるべし。都會の緣日に張りたる夜店には食品玩具

藤岡作太郎
國文學者
文學博士
東京帝國大學文
科大學助教授
石川縣金澤市生
明治四十三年歿
年四十一

カンテラ
Candelaar
オランダ語

などの多かる中に、露を帯びたる植木の葉の翠、花の紅こそカンテラの光に映えてみづくしく鮮かなるを、中流以下の市民はあれこれと買求めて、座敷に飾り、庭に植込む。裏長屋の道具の据所もなき窓前にも、藤作りて田舎の景色の面影を偲び、岡破れ鉢に唐芋を育て、作やさしき野趣を嬉しむ。長火鉢の脇の福壽草は鏡餅に對して暖かげに、軒端に吊りたる忍草は風鈴の音と共に涼し。上下貴賤を通じて自然を愛好することかくの如きは他の國民にその匹ありや。



藤岡作太郎

恐しき猪も
和歌こそなほを
かしきものなれ
あやしのしづ山
がつのしわざも
いひいづれば面
白くおそろしき
ゐのしゝもふす
ゐの床といへば
やさしくなりぬ
(徒然草)

我が國民は母の慈愛をのみ享けて、父の威嚴を知らず。呂然の愛すべきを見て、畏るべきを思はず。野をも垣をも吹亂す二百十日の風も野分の名にやさしく、峰も谷も一つに埋みてすさまじき冬の山里も、深雪といへばみやびやかなり。恐しき猪もふるの床と稱ふるにやさしく聞ゆ。など兼好がいへるは、我等が、自然に對する此の傾向を説明せるなり。雨といへば照りつきたる夏などは嬉しけれど、一日の降も十日の照より飽きくするに、卵の花くたし、時雨など、何れも趣ありて感ぜらる。自然の愛はかくして表はるゝのみならず、その名を借りて屢、人事に用ふ。文學には源氏物語の卷の名に夕顔、末摘花、葵、神朝顔、胡蝶、螢、常夏、藤袴、若菜、柏木、鈴蟲、紅梅等あり。菓子に鶯餅、櫻餅、柏餅、萩の餅、紅梅焼、時雨など枚舉するに遑あらず。今の刻煙草の

名にも福壽草白梅草月あやめ萩紅葉等あり。古く獸肉を紅葉といひ、金貨を山吹に譬へたるも、やさしからずや。我が國民は自然を愛賞する餘り、又よく之を尊重せり、尊重するものには悦んで服従す。彼等はみだりに人工の手を加へずして、自然の儘に自然を仰ぐ。此の服従を以て屈伏といふ勿れ。悦服は自動的なり、屈伏は他動的なり。屈伏するものは不平なる奴隸が氣儘なる主人に對するが如く、悦服するものは從順なる兒孫が寛大なる家長を見るが如し。任意的なるものは毫も抑壓の念をその間に感ぜず、他の意を以て喜んで己の意とす。花に對する我等の趣味が如何に異なるかを見よ。薔薇は枝ながら幹ながらの姿の美はしきにあらず、花一輪の色の艶に、香の芳しきなり。櫻は一枝の趣を賞するより、峰に互り川に沿ひて、

チューリップ
Tulip
ヒヤシンス
Hyacinth

雲とたなびきたる態の目ざましきなり。花瓶に挿す時、西洋人は花ばかりをちぎりて手毬の如くし、日本人は葉も枝もその儘に、願はくはこれに置く朝露をも落さざらんとす。一は枝を撓めて花輪を作り、花瓣を卓上にふり撒きて歡を助くるに、一は床上の盆石盆栽に自然の大景を方寸に寫す。彼は色彩の變化を喜ぶに、此は形態の多趣なるを賞すること、恰も油繪と水墨畫との異なるが如し。同じ菊を見るも彼は色を重んじ、此は形を主とすといふ。西洋の草花のチューリップ・ヒヤシンスなど、その葉に何の趣もなくしてその花の妖艶なるは、寧ろ我等の眼に毒しと感ぜらる。秋の野の女郎花、尾花、その花に何の美しきことかある。されど、あるかなきかの黄花を捧げて、なほたよくと下蔭の蟲の音にもゆらぐ様、ますほの色はやがて白くほくけ

て、露に濡れ風に靡く趣は、我が胸にしみて忘れられず。日本人が花を愛するはその外形にあらず、賦色にあらずして、その風情にあり、直ちに自然の懐にわけ入りて、その眞意を握るにあり。かくしてこそ自然を愛し、自然を尊ぶなれ。自然に親しむことの深きはこれ日本國民の特性なり。(國文學史講話)

二 詩二首

野口米次郎

詩人

慶應大學教授

明治八年愛知縣

津島町生

秋

野口米次郎

僅か二三日のことて
空氣は金びかりし始めました。
白羽二重をその中に晒したなら、
きつと黄色に染まりませう。

今私は廊下の障子を開け、
十月半ばの空氣を吸つて
その甘いのに驚いてゐると、
何處からか無數の赤い蜻蛉が飛んで来て、
私の眼前に入交り、黄金の空氣を浪打たせます。

澤山ある花の中で、私は木屋を一番好きますよ。
葉の下から小さい内氣な花が咲いて、
人の知らない間に散つてしまふ。
暑い夏から咲通して來た百日紅も、
今は二つ三つの花が残つてゐるばかりでございませう。
しばらく雨が降らないので、

カーテン
Curtain

伽羅（イロ）の黒光りする葉も汚れ、
廊下（ロウカ）に懸けたカーテンの汚染（ケガレ）が特に目立つて來ました。
地面は最早薄ら冷たいので、
今日は一匹の蟻も出てまゐりません。

あゝ秋が來ました、私の好きな秋が來ました。

私が座敷から澄みきつた紫色の空を眺めてゐると、

何時の間にやら私の目は見えなくなつて、

私の耳へ、過ぎゆく「時」の足音だけが響いて來るやうに覺えま
す。

どうんくと御承知の「時」の足踏が。（東京朝日新聞）

泉

山宮

允

山宮允
英文學者
詩人
第六高等學校教
授
明治二十三年山
形縣生

かぐはしい森の中から

滾々とわき出る泉、

若さに輝き、力に充ち、

今華やかな曙を

たぎり溢れるその美しさ。

その泉、さわやかな響を

淡紅色の朝の空にふるはせつゝ、

歡喜に不安の岩を征服へ、

愛に流通の路を拓き、

躍り、流れる、光に、勝利に。

躍り進め、若さの泉、力の泉。
 たゞ恃め、汝が生命を、歡喜を、愛を――
 愛と歡喜は勝利と光に導く。
 おゝ、薫^{クワン}しい森の中から
 今滾々とわき出る泉。 (現代詩人選集)

三 崎人一茶

本山 荻舟

柏原の名主嘉右衛門がいそぐとして俳諧寺を訪れた。

「すぐにこれから、私と一緒に本陣まで来て下され。」

「何御用で。」

「はて大切な御用ぢや。加賀様參勤の御途次、當宿にお泊りなされて、此方の風流をお聞きなされ、是非其の發句を見たいと

一茶
 小林彌太郎
 俳人
 信濃柏原生
 文政十年(二四七)
 歿
 年六十五
 本山荻舟
 名は仲藏
 新聞記者
 柏原
 長野縣上水内郡
 柏原村
 俳諧寺
 一茶の家の號

あつて、目通り仰付けられたのぢや、何と有難い事ではないか。

「折角ぢやが、御免を蒙らう。」

「あれまあ、何をいふのぢや。」

「宇宙萬物さうした御用で俗化されてしまふのが、私は大嫌ひなのぢや。」

きよとんとしてゐた嘉右衛門は、瞞すに手なしと、

「いや、これは私が悪かつた。御用といつたはつい何時もの口癖が出たので、加賀様からは入懇のお招ぢや。わざぐゝわし

の處へお使を下されて、表立つてのお使者では、却て此方が迷惑であらう、どうぞ私からさう云つて、懇に同道してくれとお頼みぢや。此方の氣心はよう知つてゐながら、ついあんな事を云つたのは、重々私のあやまりぢや。それが爲若しも此

方が来て下さらぬと、私は腹切仕事ぢやから、どうぞさういはずに機嫌を直して、一寸でも顔を出して下され。」

「あは、腹切仕事はよく出来た。併しそれ程迄にお前様を困らせては氣の毒ぢや、同道しませう。」

「やれ有難い。それでやうく、落着いた。」

併し衣服は改めない。尤も改める衣服も無いが。此の古布子でよからうの。」

古布子を二三度振つたまゝ、すぐに引懸けて出掛けようとする

一茶の袖を、嘉右衛門は一寸控へて、

「も一つ私の願ぢやが、何といつても先は百萬石の加賀様ぢや。此方も何時もの氣性を止めて、少しは御機嫌取りに、體のよい

おのれがすが
たにいふ
ひいき目に見て
さへ寒きそぶり
かな

俳諧寺
一茶肖像

春南墨信画



あのをゆゑ
まじらふ
ひいき目さへ
さへ寒きそぶり
かな

小 林 一 茶 筆 蹟

お世辭でも云ふ様に
して貰へまいか。」

「あは、是は又異なお
頼みぢやな。併し外
ならぬ名主殿の事ぢ
や。思ひ切つて、やり
ませう。」

「有難い。何時も
其の様に素直に云つ
て下さると、此方も好
いお人ぢやがなあ。」

「あは、お前様も亦、何

時も其の様に腰が低いと、好い名主殿ぢやがなあ。
一茶は皮肉に笑ひながら、弊衣垢面、僣^や僣^しで跛^びで醜^{みにく}い姿を恥づる色も無く、平然として嘉右衛門と一緒に歩んだ。
柏原の本陣には梅鉢の紋打った幕を張渡し、盛砂に打水、高張提灯、儀容堂々として百萬石の威を示してゐたが、前田侯は案外打寛いだ體で一茶を引見した。嘉右衛門は無論御前へは出られなかつた。

「其^そ方^ちが一茶か。よう參つた。豫て風流の名は聞いて居たが、俳味とは、どんな事ぢやの。」

一茶畏るゝ氣色も無く、膝を進めて、

「俳諧の道は孔釋の道と同じでござる。今の俳諧を云ふ者は、唯題を得て發句を作るだけの事。共に談ずるに足りませぬ。」

孔釋
孔子と釋迦

「左様か。して其方の俳諧はどうぢやの。」

「山水風月、皆これ俳家生涯の事でござる。心の赴く儘に發するのが、即ち自然の俳諧でござつて、巧まぬものこそ最も俳味は濃やかでござらう。尸位素餐の輩に眞の俳諧が解らう道理はござりませぬ。」

と傍若無人の放言に、席に在る者は色を變へたが、侯は却てにこやかに、

「齒に衣着せずよく申した。聞きしに違はぬ其方の器量。予は其の意氣が氣に入つたぞ。」

「あは、恐れ入りまする。」

「これ、一茶に膳部を取らせよ。」
「はつ。」

やがて運ばれた膳部に對しても、一茶は何の遠慮も無く心のままに頂戴した。次いで引出物として、時服一領下された。一茶は一寸考へてゐたが、にこりと笑つて、

「有難く頂戴仕りまする。ではこれでお暇を。」

「左様か、大儀であつたの。」

一茶は御前を下らうとして、何故かふと躊躇した。

「どう致したか。」

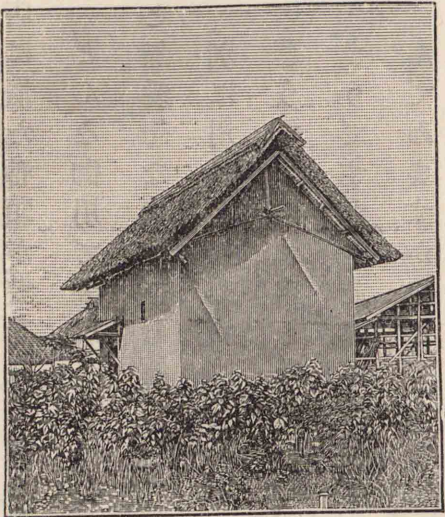
「いや、飛んだ事を失念致しました。高貴の御前へ出たら、必ず追従申すやうにと、折角名主に頼まれて参つたのに、とんと忘れて居りました。改めて御世辭を申し上げます。」

と一茶は額の汗を拭きながら低頭した。

「は、面白い事を申す、其の罰として一句よまぬか。」

子供まで、のんのうと呼ぶ梅の花。

一茶としては珍しく如才のない句であつた。



一 上首尾で本陣を出た一茶は、
茶 間も無く庵に入ると、早速硯
の を引寄せて、塵紙の皺を伸し、
舊 禿筆を嚙んで、
宅 何のその、百萬石も笹の露。
と書いて見た。門人は顔を

見合はせた。

享和
光格天皇の御代
(西暦一八四〇)

享和某年にぶらりと又江戸へ出た一茶は、藏前の札差で井筒屋

夏目成美

佛人

江戸の生

文化十三年(三四)

亡

年六十八

竹阿

その頃の一茶の號

八右衛門と云つた夏目成美の許を訪ねた。

「信州の竹阿と申すものぢやが、御主人御在宅ならお目に懸りたい。」

店に居た番頭が、装を見て眉を擡めながら、

「どんな御用ですか。」

と無愛想な挨拶をした。

「別に用事といふではござらぬが、風流の道に遊ぶ者、御高名を慕うてお訪ね申したのぢや。」

「さうですか。それは折角でしたが、生憎主人は、近頃病氣で寝込んでゐますから、とてもお目には懸りません。」

「ほう、御病氣で御目に懸れぬ。それは残念ぢやが、致し方が無い。重ねてお訪ねもなるまいから、誠に申しかねましたが、一

寸料紙と筆とを拜借願ひたい。」

信濃では、月と佛とおらが蕎麥。

「飛んだお邪魔を致しました。」

其の儘暇を告げて、すたく御厩橋の方へ歩いた。

「若し其處へ御出でのお方、一寸御待ちなされて下さい。」

呼ばれたのは、私の事かのう。」

「へい貴方が信州のお客様でしたな。」

「信州の乞食坊主ぢやが、してお前様は。」

「井筒屋の者で御座います。只今は飛んだ失禮を致しました。朋輩の者が大變主人に叱られました。お残り下さいました句を主人に見せました所、お目に懸りたいと申しますから、ど

御厩橋

隅田川に架けて

ある橋

吾妻橋と兩國橋

の間にある

うぞもう一度御立寄を御願ひ申したいので。」

「はゝゝ、それは却て痛み入りました。固よりお目に懸りたくて御訪ね申したのぢやから、幾度でも戻りませうとも。」

一茶は快く踵を返した。

成美は若い頃から脚を病んで、起居も自由を缺き、自ら不隨齋と號して居た。不具な一茶に對して同病相憐む心からでもあつたらう、快く家に留めて、何時までも逗留することを勧めた。

「話は後でゆつくり出来る。先づ湯にでも入つて、旅の疲を休めるが宜しからう。」

「それは何よりよい。湯といふものには最早幾月對面せぬか解りませぬわい。」

「あゝ、すつかり旅の垢を落して、久し振に好い心持でござりました。」

と云ひながら、座敷へ戻つた一茶の顔を見ると、青や赤や色々の斑が、隈取の様に染みついて居るので、成美は思はず噴きだした。

「はゝゝ、どうなされた。」

「はて何が其の様にをかしうござります。」

と、何にも知らずに平氣であるのが益をかしい。

「何がではありませんよ、まあ一度鏡を見なさるが好い。」

「鏡などといふ物はついぞ見た事もござりませんが、一體どうしたといふので。」

「いや、どうもかうも無い。湯にはひつて何をして御出でなされたか。そればかりではない。両手にまで其の通りえたい

の知れぬ斑點をつけてゐられるではござらぬか。
「や、これは大變。はゝゝゝ、解りましたよ。湯から上つて軀を拭くのに、つい手拭を忘れて出たので、取りに入るのも面倒と、袂に在つた風呂敷で間に合はせたが、偕は此の色が移つたのでござらう。」
と、平氣で取出して見せた。それはかなり汚れた更紗の風呂敷であつた。一茶にこんな無頓着は珍しい事ではなかつた。

最眞目に見てさへ、寒き素振かな。

めでたさも中位なり、おらが春。

露散るや、各、明日は御用心。

瘦蛙負けるな、一茶こゝに在り。

罷出たるは、此の藪の墓にて候。

等は何れも人口に膾炙し、又よく一茶の人と爲りを現してゐる。

文政二年の冬十月十六日から一茶は中風に罹つたので、再び遊歴の望を絶ち、餘命幾何もない事を感じて、壽命決定の辭を作り、

兎も角も、あなた任せの年の暮。

と吟んだのは師走二十九日、五十七歳の暮であつた。併し壽命はまだ残つて、復新しい春を迎へたので、元日の句に、

今年から丸儲けぞよ、娑婆の空。

とよんで、以來蘇生坊と稱して居た。

文政十年霜月、病氣の上に老衰が加つて、十九日遂に臨終と見え、門人が、何ぞ辭世でもありませんか。といふと、一茶はかすか

文政二年
仁孝天皇の御代
(1819)

明專寺
柏原にある寺

に口を動かして、
盥から盥に移るちんぷんかん。
と云つた。そして木の葉と共に散つた。享年六十五。火葬に
して明專寺に葬つた。
其の後門人が記念に建てた「松蔭に寝て喰ふ六十餘州かな」の句
碑は、今も残つて居るのである。(名人崎人)

小泉八雲

Lafcadio Hearn
(1850—1894)
英國よりの
歸化人
本名ラフカ
ディオハーン
東京帝國大
學文科大学
講師
明治三十
七年五月
歿

四 松江の曉

小泉 八雲

松江で朝の夢を破る最初の物音は、ちやうど耳底でゆるやかな
大きな脈が搏つやうに響いてくる。米搗の音である。杵の落ち
る響が一定の拍子で洩れてくるのが、日本人の日常生活に伴ふ
あらゆる音響の中で最も哀れに思はれる。米搗の音は日本と

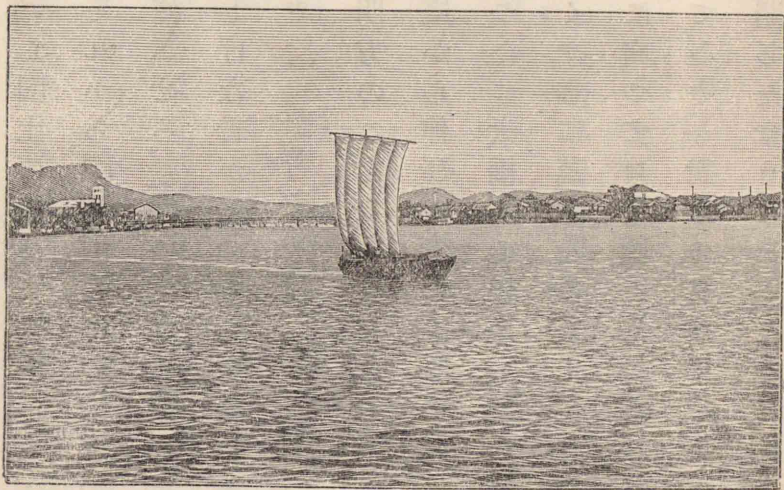
いふ國土の脈搏である。

それから禪刹洞光寺の大きい鐘がごうんと響いて、市街の空を
揺がせる。續いて私の家に近い材木町の地藏堂から太鼓の淋
しげな音が晨の勤行を告げる。最後に行商人の物賣の聲、大根
やい、「蕪菁や蕪菁。」薪や薪。

明方のこんな物音に起されて、私は二階の障子を開けて、河畔の
底から伸びた春の若葉の軟かな緑の雲越しに朝景色を眺めや
つた。大橋川の幅廣い、鏡のやうな河口が、遠くの方では、わな
くやうに萬象を映寫して、微かに光つてゐる。此の川は宍道湖
に向つて口を開け、湖は右手へ擴がつて、杳乎たる連丘に包まれ
てゐる。對岸の日本の家屋は戸が皆閉つてゐるので、恰も箱を
閉ぢたやうである。夜は明けたが、日はまだ出ない。遙かに見

洞光寺
松江市雜賀町に
ある曹洞宗の寺

大橋川
中と宍道湖と
の間を通ずる川



湖 道 尖 と 江 松
 渡すと、薄色の霞が湖水の盡端に長くたなびいてゐる。その星雲状をした長い帯は、日本の昔の畫で見る通りであるが、實際の現象を眺めたことのない者には、畫工が奇を衒つたとしか思はれたいに相違ない。山といふ山をこの霞が蔽うて、峰から峰へ、はて知らぬ長さの紗のやうに横に延びて居る。だから湖水は實際より遙かに大きく、味爽の空の色と入交つた

美しい幻の海となつて見える。山々は霧の中に浮ぶ島嶼で、夢の様な一帯の丘陵は果しのない土手道かと怪しまれる。そして霧が立つに連れて、その趣はおもむろに變つて行く。朝日の黄色の縁が見えてくると、今までのよりは更に弱い、細かな光線——分光鏡の紫と青貝色——が水面を射る。梢の上は弱い光を受ける。水のかなたにある高い建物の木地の色が、美しい靄の爲に蒸氣の立つ黄金色へとかはる。
 朝日の方へ向くと、澤山橋桁の並ぶ長い木造の大橋の彼方に、一艘の船が今しも帆を揚げようとしてゐる。こんな奇妙な恰好の美しい船を見た例がない。正にこれ蓬萊の夢である、霞にほやけた船の精靈である。しかし此の精靈は雲と同様、光線を受けて、薄青い光の中で金色に震へてゐる。

庭先の川端から手を拍つ音が起つて来る。一回、二回、三回、四回。その手の持主は植込に遮られて見えない。しかし對岸の埠頭の石段を下りる男や女の姿が見える。めい／＼帯に小さい青手拭を挿んでゐて、顔と手を洗ひ、口を漱ぐ。これは神道の祈を捧げる前に必ず行ふ潔齋である。それから顔を朝日に向け、四たび手を拍つて拜む。長い橋の上からも他の拍手の音が反響の如くに出てくる。遠くにある、軽い優美な、そして新月のやうに彎曲した小舟からも出てくる。この頗る異様な恰好の舟の上から、手も足も裸の漁師が、黄金色をした東雲の空を拜んでゐるのである。最早拍手の數が増して、殆ど鋭い音響の連發となつた。それは人々が今皆朝日―お日様―天照大神を拜んでゐるからである。「いとも貴き日の造り主よ。この心地よき日光

を賜ひて世界を麗はしくなし給ふことを謝し奉る。言葉はこの通りでないまでも、これが無數の人の衷心である。

杵築の大神

官幣大社出雲大

社

祭神は大國主命

一畑山

鳥根縣簸川郡に

ある名刹

本尊は薬師如来

朝日に向つてだけ手を拍つ者もあるが、大概は西の杵築の大神に向つてもさうするのである。顔を東西南北に向けて群神の名を低聲で唱へる者さへ随分ある。天照大神を拜んだ後、一畑山の高峰を眺めて、盲人の眼を開き給ふといふ薬師如来の大伽藍のある處に向ひ、今度は佛教の儀式に従ひ、掌を合せて軽く擦るものもある。しかし日本で最古の此の國では、佛教徒も亦神道信者であるから、誰も／＼古風な神道の祈の文句を唱へる。「拂ひ給ひ、淨め給へ、とほ神をみため。」
手を拍つ音が歇んで、一日の仕事が始り出し、橋の上にはからころといふ下駄の音がだん／＼高く響いてくる。大橋の上で鳴

る下駄の音は忘れられない音である。速くて、陽氣で、音樂的で、盛な舞踏の音のやうである。實際また舞踏である。みんなが爪先で歩いて行く。朝日の射した橋の上を通る數へきれぬ人の足がちらく、するのは驚くべき光景である。この足は皆細くて、恰好な均齊を得てゐて、希臘の古甕(フニケ)に描いた人物の足のやうに輕やかである。

やがて學校へ急ぐ子供達が出てくる。彼等の駆ける時に、綺麗な飛白の着物の濶い袖が波動するのは、ちやうど大きい蝶が羽搏きをするやうである。親船は白色や黄色の大きい翼を擴げるし、埠頭の側で夜中眠つてゐた小蒸氣船は煙筒から煙を吐き始める。(まだ知らぬ日本の瞥見)

厨川白村

名は辰夫

文學者

文學博士

京都帝國大學教

授

大正十二年破

年四十五

出雲神話

素戔鳴尊の大蛇

退治・大國主命

の國土平定など

宍道湖

出雲國八束郡の

淡水湖

嫁ヶ島

宍道湖中の小島

松江名所は

松江名所は數々

あれど千鳥御城

に嫁ヶ島

千鳥のお城

松江城

五 小泉先生の舊栖

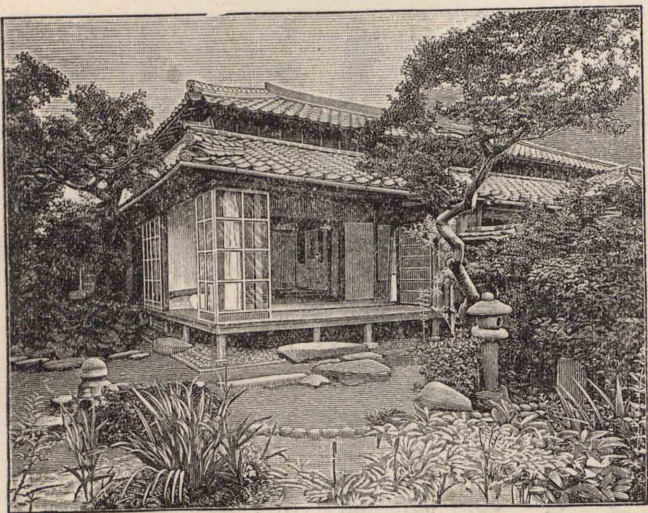
厨川白村

山陰の古き都松江は今もなほ出雲神話を想はせる夢の都である。さうだ、美しい夢を見つゝ眠るが如き夢の都である。わたしは今臨水亭といふ旅館の欄に倚つて展望を擅(サト)にしてゐる。松江大橋嫁ヶ島どこを眺めて見ても、思ひ切つて暢氣なものである。すべてがどんよりした沈靜な薄暮の氣に包まれてゐて、さながら光明の國から去らうとする影を見るやうだ。

此の夢の都たる出雲の國の郷土から生れた民衆藝術である安來節に、松江名所はかずく、あれどと數へた千鳥お城よりも、嫁ヶ島よりも、更に遙かに意義の深い名所が、ほかに、今一つある。それは殆ど世界的に有名な名所であつて、しかも日本人が殆ど顧みない名所だ。否、松江の人すら多くは知らない名所だ。い

山陰線
京都・豊岡・鳥取
松江・山口・小郡
に通ずる鐵道線

ふまでもなくそれは小泉八雲先生、又の名ラフカディオ・ハーン氏の舊栖である。日本を見物に来る西洋人の中には、日本人の全く知らない處をやつとの事て尋ね當て、あの不便な山陰線の汽車に乗つて、見に行く人が近頃は殊に多い。それどころか、はるく太平洋の彼方から先生の遺跡を訪はんがためにのみ日本に來遊する外人もあるのだ。現にこのたび米國で先生の全集刊行の舉あるに際して、松江時代の舊居の寫眞を撮らんがため、かの國からわざわざ出かけて來た人さへあるではないか。あの稀世の名文を以て日本を世界に紹介された先生の遺跡を保護しようともせず、先生の功に報いるに殆ど何事をも盡してゐない日本人の無知と忘恩とを見て、快からず思つてゐる西洋



松江小泉八雲の舊栖

人の多いのは、まことに無理のない事だと思ふ。先生にはあの十數卷の名著がある。英語の滅びないかぎりラフカディオ・ハーンの文名は世界に不朽なものだから、その遺跡などを保護しようがしまいが、先生のために寸毫の増損するところはないまい。たゞ日本人として果してそれで濟むものだらうか。文藝の尊嚴を解しないその無智とその忘恩とを世界に廣告するやうになるのは残念ではあるまいか。

城址の美しい青葉を照す午後の日ざしが傾くころ、静かな濠^{わう}ばたの或家の門に私の車はとまった。それはいかにもさむらひの敗^く殘^れ凋^れ落^つのあとをおもはせるやうな家中屋敷の一つであつた。古びた門構といひ、正面の玄關といひ、見るからに封建時代そのまゝのものであつた。正面の玄關の左手に四疊があつて、それは南の方の小さい庭に面してゐる。苔むした石燈籠や庭石も、かつては先生が飽かず眺められたものであつた。殊に縁側に近い處にある百日紅だの、珍しい老木の大本蓮だのは、先生の殊の外なる愛樹であつたと聞くさへ懐かしい。樹木の精ハムドライアットの神話を語つた古代のギリシャ人のやうに、先生も亦草木に宿る生命に強い愛惜の念を持たれた。後年東京に移られてからも、或寺院の老木を黄金に代へて惜しげもなう

Hamadryat
ツド
ハムドライア
樹の精
森の女神

根岸さん
根岸磐井
松江の銀行家



伐りたふさうとした俗僧を見て、ひどく怒られたといふ話がある。先生はその深い愛の生活、強大な感情生活の裡に、自然と人生と超自然のすべてを抱擁してゐられた人であつた。その次の間の十疊は、先生が楽しく起臥された茶の小間であつた。洋風の椅子、八などを用ひないで座蒲團に坐り、日本の煙管で日本の刻煙草を吸ひながら、奥の持主であり現在の主人である根岸さんは、私をこの部屋に通して、色々な話をされた。

大久保の邸
東京の西郊
大久保町字大久
保

“Glimpses
of
Unfamiliar
Japan”

Robert Louis
Stevenson
(1850—1894)

ロバート、ルイ
ス、ステイヴン
スン

日本瞥見録

日本に於ける先生の舊栖の地としては、この松江の外に熊本時
代のもあれば、また現在未亡人の住まつてをられる東京の大久
保の邸もある。しかしこの出雲の地は、日本に歸化された先生
に取つては特殊な意味がある。天涯萬里漂浪の孤客として、そ
の頃はまだよく内情を世界に知られなかつた遠い日本、日本の
しかもまた山陰の片ほとり、夢の都、神話の都に來て、そこで舊藩
士の女小泉氏を娶られた。そして、英米の社會からは全く韜晦
し去つて、突如としてこの地からあの最大な名著「日本瞥見録」二
卷を公にされたのだ。作者は果して何處にある如何なる人ぞ
と、かあなたの文壇の驚異となり、はては「ラフカディオ・ハーン」その
人の實在をすらも疑はれた時があつた。先生と同じく近世散
文の巨匠であるロバート、ルイス、ステイヴンスンも、故國スコッ

サモア
南太平洋中
にある大小
十四個の群
島

Somoa

トランドを出てからは足跡天下に遍く、米國のサンフランシス
コで結婚して後太平洋をさまよひ、はてはサモアの島に世を終
へるまで、後の研究者はその足跡をたどるのに没頭してゐる。
私は松江に於ける先生のこの舊栖の地が、南洋のサモアに於け
るステイヴンスン終焉の地の如くに、今後は益々多くの文學順禮
者の驚歎と好奇の念とを惹くことであらうと思ふ。先生自ら
に於ても、その楽しいゆかしい思出と愛惜とが、特に松江のこの
家から離れなかつたものと見えて、後年熊本から東京帝國大學
に轉任される途中、まだ全く山陰地方に汽車の便のない頃
—— わざ／＼廻路をしてこの第二の故郷を訪はれ、わが家に歸
つた。といつて喜ばれたさうである。この茶の間に接した北向の六疊の一室が、先生の書齋であつた

といふ。すべてが閑寂な、古びた、いかにも士族屋敷らしい空気に満ちた部屋である。障子を開けて縁側に出ると、その庭には小さな池があつて、真中に一本の松を植ゑた小島がある。裏手の方は以前しばらく模様がへしてあつたのを、近頃根岸さんがまた先生在住の頃の舊態に復せられたのださうだ。庭の左の方にある土藏を指しながら、根岸さんは色々な話をして私に聞かされた。

「この池の中には随分澤山蛙がゐたさうですが、それを捕らうとして、藏の後の方から蛇だの鼯だのが出て来たもんださうです。時々蛙が捕られると、あはれな悲鳴を擧げるので、その時は先生の一家が皆飛出して来て、大騒ぎをしたと、奥さんが話されました。それで先生は時々食残りの肉を皿に入れて

藏の石段に置き、蛇や鼯に與へられました。『私が御馳走してやるから、蛙を捕る事だけはよしてくれよ』と先生はいつもいはれたさうです。

さういふ事を根岸さんは話された。裏の籬を越えて右手に見えるのが赤山の杜で、それから聞える鳩ぼつぼや杜鵑トビの聲に耳を澄ましながら、先生はこの書齋に引籠つて冥想もし、讀書もし、創作もされたのであつた。また正面遙か向ふの方に、樹間を洩れて見える山が、山中鹿之助の城址ださうである。

ゆつくり話を聽いてゐる間に、日は暮れさうになつた。再び部屋に歸つて座に就くと、もう人の顔がぼんやりするほどにほの暗かつた。私はこの夢の都に来て夢の家をたづね得た事を喜びながら、暫くして辭し去つた。門前の濠の水は深く濁つて、青

山中鹿之助
名は幸盛
尼子氏の臣
天正六年(三三〇)
歿
年三十六

たなばた物語
"The Romance
of
the Milky Way"

葉のゆふべの影を宿してゐた。翌日私は京に歸る前、記念のために、松江の本屋で、ドイツのタウヒニッツ廉價版の「たなばた物語」一部を求めた。これは先生が雑誌などに載せられただけで、遂に未定稿のまま、まだ一冊の本には纏めないうで世を去られた數篇を、先生の歿後に出版したものである。松江名物の大きなあはび貝を五つと、先生のこの遺著とを家苞にして、私は夢の都たる松江を去つた。(厨川白村集)

六 空行く雁

頃は一萬、曾我十郎祐成の幼名、箱王、曾我五郎時致の頃、は人皇第八十一代安徳天皇の養和元年、あらたまの年立歸りて、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上に戯れながら、いかに母御前、父はいづくにおはしますぞ

一萬
曾我十郎祐成の
幼名
箱王
曾我五郎時致の
幼名

曾我殿
祐信

工藤一藤
祐經

鎌倉殿
源頼朝

や。其の佛は何國にましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前、いざさせたまへ。といひければ、遙かに忘れたる空も今更思ひ出されて、消えいるばかりなり。母泣くくゝのたまひけるは、「あの曾我殿こそ己等が父にてあれ」と心強く語られけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、「父御前は、まことやらん、狩場より歸りたまふ道にて、工藤一藤とやらんに射られて死にたまひぬ」と兄御前は語らせたまふぞや。當時鎌倉殿の切りものにて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等が此の里にあるを知らずや過ぐらん。など大人しく語れば、母より始めて女房たちまで皆袖をぞ絞りける。かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄

弟二人庭に出でて遊びけるに、五つ連れたるかりがねの南をさして飛びゆくを見て、一萬申しけるは、あれ見たまへ、箱王殿。空



（會圖語物我曾筆重廣） 見る雁飛弟兄我曾

殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとか

に飛ぶ翼も、別の翼ぞ交へぬ。五つあるは、一つは父、一つは母、三つは子どもにぞあるらん。物言はぬ鳥類だにかくの如し。我等人倫に生れながら、和

や。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。我々より幼き者も馬鞍ひ續くれば、いつよりも今宵は父御前の戀しく思ひ參らせらるるぞや。とて、袖に顔を差入れてさめくと泣きければ、弟も小賢しく顔をあはせて泣きゐたり。一萬の乳母の女房之を聞きて、「あなあさまし、人もこそきけ。いかに和上藤たち、夜も更けぬるに、さやうにはおはするぞ。とくく入らせ給へ」と恐しげにいひければ、二人の者は門外に逃げいでて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りにつけり。其の後は、二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世になき父を慕ひつゝ、語りあはするまではなけれども、唯目ばかりを見合せ

森林太郎

號は鴨外

醫學者

文學者

醫學博士

文學博士

陸軍々醫總監

帝室博物館總長

石見國舊津和野

藩生

大正十一年薨

年六十一

て互に袖をぞ濡しける。未だ十歳にも満たざるに、あはれは深く思ひ知りけり。或時兄弟は竹の小弓、薄矧の小矢を取添へて遠侍に出でて遊びけるが、明障子のありけるに二人立向ひ、あなたこなたに射通して、一萬箱王に申しけるは、我等もいつか成長して、和殿は十三、我は十五にだにもならば、如何ならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如く刺合ひ、射取りて後には、ともかくもなりなん。和殿も弓をよく射習ひたまへ、我も習はん。弓矢は男の一の能にてあるなるぞ」といひければ、弟も打領きけり。年ばへには恐しき事かなと人々思ひけり。(會我物語)

七 曾我兄弟

第三幕

森林太郎

幕の外

十郎五郎登場。續松を把る。

十郎 見て置いた、これは假屋ぢや。油斷いたすな。

五郎 心得てござる。

十郎 こりや、五郎。父上がお討たれなされてから、十七年の久しい間、我々二人が念頭を、離れぬ遺恨を霽すは今ぢや。

西王母が園の桃は

三千年に只一度

花を開くと傳へ聞く。

五郎 又金輪王の出づる時、

現るといふ優曇華も、

稀に逢ふ日の譬なり。

金輪王

佛教で須彌山の

四洲を統治する

帝王だといふ

西王母

漢の武帝の頃の

仙女

十郎 待ちに待つた當の敵、左衛門尉は言ふに及ばず、いで逢ふものに容赦はいらぬ。ぢやが、女ばらも許多ある。逸つて無益の殺生すな。

五郎 仰やるまでもござらぬ。

十郎 いざ。

五郎 いざ。

(二人幕を裏けて入る)

板戸をさしたる假屋の縁の前

十郎五郎登場

五郎 兄上、敵はどこへ参つたでござらう。

十郎 (左手を顧みる) 晝酒飲うてをつたのは、今の假屋ぢや。それ

にあの通人影も無い。彼奴我等が寄せると悟つて、急に臥戸を換へたと見える。はて、どこを尋ねたものでござらう。

五郎 此の上は是非もない。

假屋々々を片端より捜すまでぢや。

十郎 待て。大切の場ぢや。

(假屋の板戸を開き、龜鶴燭を乗りて登場)

龜鶴 波に漂ふ沖津舟

しるべの山はこなたぞや。

十郎 さては龜鶴がしるべいたすか。五郎、続け。いざ。

五郎 さや。



(會我十郎舞臺姿)

(龜鶴入る、十郎五郎續き入る。夜廻の卒二人、一人は右手より、一人は左手より
登場)

第一の卒 や。これはお役目御苦勞ぢやの。

第二の卒 お互ぢや。(板戸の方を見る。)こゝはどなたやらの假屋ぢ
やつたの。

第一の卒 こゝか。不斷はお屋形の宿直の人達が、代り合うてさ
がつて息まつしやる處ぢやが、今夜は工藤殿が客人と一
しよに這入られた。

宮司

備中吉備津宮司
大藤内

第二の卒 客人といふのはあの象のやうに太つた宮司殿か。

第一の卒 さうぢや。あゝ又降つて來た。どりや一廻してしま
はうか。

第二の卒 そんなら又後に逢ふぞよ。

(卒二人入り違ひて退場。大藤内板戸を蹴放ちて登場。郎五郎續きて登場。)

大藤内 お主達は曾我の同胞ぢやな。工藤殿を殺した下手人は
わしが見極めた。後日に異論を言ふまいぞ。

十郎 何を。

(十郎、大藤内を一刀切る。大藤内俯臥になる。五郎腰を切放す。)

五郎 馬は吼え

牛は嘶く

世なればや、

足二つもて

四つに這ふらん。

十郎 (笑ふ) こやつ平家の世盛には、妹尾に附いて榮を求め、その
罰に召放された領地を、又工藤の手で取返しをつた。世渡

妹尾
妹尾兼康
平家の士

上手奴。四這に這うて世を渡れ。

(十郎五郎共に笑ふ。)

もうこれまでぢや。潔く名告つて討死せう。

五郎 さうぢや。兄上、いしくも言はれた。

十郎 やあ。假屋の人々。

かねて音にも聞きつらん、

目のあたりには今し見よ。

伊豆の國人河津の次郎祐親には孫、三郎祐泰がわすれがたみ、養家の氏を冒して曾我の十郎祐成、

五郎 同じく五郎時致、只今假屋の内に於て、父の敵工藤左衛門尉祐經を討取つたり。

十郎 我と思はん人々は、

疾うくこゝにいで合ひて

二人 御討留め候へ。



(曾我五郎舞臺姿)

(二人暫く屏息して物音を聞く。)

五郎 誰も出ぬではござらぬか。

十郎 無下のものぢや。さらば馳廻つて名告らう。

五郎 まるれ。

將軍家の屋形。

蔀の外、板縁。雨。

五郎 登場。

五郎 兄上。兄上。

仁田の聲 (舞臺の背後にて) やあ。假屋の人々承れ。狼藉ものゝ一人

祐成は、伊豆の國人仁田の四郎忠常が討取つたり。

鬨の聲 同上 えい、おう。

五郎 はつ。兄上はお討たれなされたか。此の上は祖父様を自滅させ、敵工藤を最上せられた將軍家を一太刀恨まう。さうぢや。

(五郎縁に登る。五郎丸被衣を被りずれ違ひ被衣を脱ぎ、背後より五郎を抱く。五郎板縁をふみ抜く。二人無言にて揉合ふ。)(幕)

第四幕

將軍家の屋形。垂簾。簾の下には諸大名左右二列に坐す。中央前景に狩野介宗茂、新開荒二郎忠氏ゐる。

第一の大名 最早辰の刻になつてござる。犯人を預つた大見の小平太はどう致いたやら。(第二の大名に) 固より曾我の殿

原は奸盜山賊の類でもござらぬに、笑止にも繩附になり申した。

第二の大名 情ない儀でござる。よしや御假屋を汚したとて、討つた工藤は父の仇ゆゑ、申し宥める道もござらう。御屋形の御座所近く推參致いたと申すからは、罪科は所詮逃れますまい。

(雑色登場)

雑色 只今これへ曾我の五郎を召連れてまゐりまする。

(雑色退場。五郎登場。大見小平太實政繩を取る。狩野座を進む。)

狩野 曾我の五郎、承れ。只今これへ召されたは、某と新開とが承つて、敵討の宿意を尋ねる爲ぢや。さあ逐一に申し立てい。五郎 (怒る) だまれ、狩野介。祖父伊東の次郎祐親が將軍家と不和

武智麿
不比等の子
藤原南家の祖

のため、自滅に及んでから以來、久しく落魄いたいてをるが、
某とても遠祖左大臣藤原の武智麿が流を汲む、由緒ある身
分ぢや。申す程の事はぢきに申さう。若しそれがかなは
ぬなら、何事も申すまい。

狩野

怪しからぬ事ぢや。某は君命によつて尋ねる。

新開

それを彼此申すのは、犯人の身となつても、まだ君に楯つく
所存か。

頼朝の聲

(簾の内より) いや、待て、狩野、新開。曾我の五郎が申す條尤
もなれば、頼朝みづから聽いて遣はす。

(簾を半ば捲く。頼朝登場。舍人二人、近臣二人隨ふ。狩野退く。新開
中央に残る。)

五郎

(新開に) そこを退いて貰はう。これより物申すに、和殿がそ

れにゐては、和殿に物言ふに似て、快うない。

將軍

新開退いて遣せ。

新開

はあ。(新開退く。)

將軍

見れば昨夜の雨に、その土は濕つてをる。誰かある。曾
我の五郎に敷皮を取らせい。

卒はあ。(卒右手より敷皮を持出で敷く。)

五郎(感激す)

此の敷皮を見るにつけ、

十年の昔ぞしのばるゝ。

年頃六波羅に勤仕して、平相國親子の覺めてたく、名利のた
めに訴訟を構へ、怨毒によつて殘害を行つた、小賢しき敵工
藤が、時勢の移り變るに乗じて、宇佐美殿によつて御目見え

平相國親子
平清盛とその子
宗盛

を賜はり、伊東の莊を拜領し、猶それにも飽足らいで、我々兄弟を殺さうと、讒舌を揮うた爲、

兄一萬は十二歳、

此の箱王は十の時、

由比が濱邊に伴はれ、

引据ゑられし敷皮は

夢見ごちに春を待つ

荅を推おきし悲涙の座。

今は首尾好く父の仇工藤を討つて怨をはらし、此の世に思ひ置くことなければ、

最期を急ぐわが爲に、

此の一枚ひきの敷皮は、

父に見えん彼岸かきに

渡す弘誓こうぜいの舟筏。

有難く拜領いたす。(敷く)

將軍 殊勝な覺悟ぢや。然らばみづから尋ねるが、此の度工藤を

討取つたのは、年頃の企か、但しは俄かの思立か。

五郎 それは申すまでもない事。我等が父を討たれたは、十七年の昔。兄は五歳、某は三歳、しかと意趣をも存ぜんのだが、兄が九つ、某が七つになつて、物心を辨へてから以來よは、片時忘れぬ復讐でござる。

將軍 然らば伊豆にある工藤が、十年の久しい間、月に四五たび、乃至十度も鎌倉へ通うたに、なぜ途中では討たなんだ。

五郎 いかにも其の往返には心を附け、足柄箱根・大磯・小磯・由比・小

坪のあたりにたゞずみ、兄弟附け狙うたが、身分ある彼が同勢、多き時は百騎に餘り、少なき時も五六十騎、衆寡敵せず控へ申した。

將軍 ふん。さもあらう。叔工藤は父の仇ゆゑ子細ないが、多くの麾下の侍をば何故妄に傷つけた。

五郎 固より我等兄弟は、かゝる狼藉を企てたからは、刃向ふものあらん限、千萬騎をも切りなびけうと存じたが、我等の名告る聲を聞いて、足の立所も知らず逃げ行くゆゑ、後日のため一太刀づつ印を附けたまでゞござる。

將軍 して大藤内はなぜ討つた。

五郎 あれは笑止なものでござつた。恩ある工藤に助太刀もせず、廣言を申したゆゑ、切りすてはいたいたが、所領安堵を喜

んで下國する途中、報謝のために引返したは、せめてもの心掛、今はなか／＼不便に存ずる。

將軍 神妙な詞ぢや。ぢやが、それ程義理を辨へたそちが、既に敵を討つた上、なぜ予が座所に踏込んだ。

五郎 これは憚ある申し條かは存ぜぬが、流人となられた將軍家の御爲には、祖父伊東の次郎は東道主人ではござらぬか。それが、成行とは申しながら、三浦殿に預けられて自滅致いた。又敵工藤は格外の御引立を蒙つた。これらの遺恨なきにあらねば、一太刀お恨み申した上で、自害いたす覺悟でござつた。

將軍 おう。好う藏さずに申したぞ。此の度の企を前以て存じてをつた同志のもの、乃至手引きのものがあらう。事の序

にそれも申せ。

五郎 さやうなものは一入でもござらぬ。

將軍 さはいへ、母には打明けたであらうな。

五郎 こは仰とも存ぜぬ。鳥獸も子をば思ふ。二人の子供に死に、往けと申す親のござらうや。

將軍 おう。一族否運に陥つたそれが申し條としては、一々尤も至極に存ずる。仁田の四郎はをらぬか。

仁田の聲 (上手背後にて) はあ、四郎忠常只今それへ。

(仁田、首桶を持ち、登場)

仁田 仰によつて曾我の十郎が首級、これに持参いたいてござる。

將軍 五郎。兄に逢はせて遣はずぞ。それ、いましめ解け。

(天見、五郎の繩を解く。)

仁田 實檢の上申し請ひ、和殿に見せる十郎が首級ぢや。いざ對

面いたされい。(首桶を開く。)

五郎 懐かしや、兄上。

點し列ねし松の火の

消えなば共にと思ひしに、

不覺を取つて縛められ、口惜しくもながらへ申す。さるにても、兄上、どうしてお討たれなされたか。よし仁田殿は猛くとも、時致だに居合はせたら。

仁田 いや。和殿の助太刀までもない。十郎が鋭き太刀風に、某は切りまくられ、右の肘と小鬢とに薄手をさへ負うたれど、十郎が運拙く、我が薙刀に拂はれて、刃はほつきと鏝元から。五郎 なに。兄上の太刀が折れたとか。なぜ我が太刀を兄上に

佩かせなんだか。

仁田 おう。その悔み道理至極ぢや。某とても一門の十郎ゆゑ、首討つ所存はなかつたが、引かうといつた某を、十郎みづから呼止めて、首を我が手に授けたのぢや。

五郎 さてはよしみある御身が手に、兄上好んで掛かられたか。

(五郎歎く。犬房丸鞭を持ち走り出づ。)

犬房 父上の敵、思ひ知れ。(五郎を鞭うつ。)

五郎 や、この小童は何者ぢや。(五郎睨む。犬房たじろぐ。)

仁田 犬房丸、御前ぢやぞ。

五郎 なに犬房丸が御身か。

彼も人の子、釋くて

親を討たれし悲みは

いかでか我に異ならん。

果報の繩に引かれずば、

刃を取りて立向ひ、

御身に討たれん我が身なり。

刑場の土になるわしぢや。せめてもの心遣りに、さあ、其の
答で打つてくれい。

犬房 父上を討つたお前は強い人ぢやと思つたに、優しい事を言
うて下さる。それではどうも打たれませぬ。

五郎 おう。さうか。さあ、につくい小わつば打たれるなら、打つ
て見い。

犬房 なんの打たいで。おのれが、おのれが。(連打す。)

將軍 もう好い、好い。犬房、それで堪忍いたせ。

閩外の職
上古王者之遺
將也、跪而推轂
曰、閩以内者寡
人制之、閩以外
者將軍制之。
(史記、馮唐傳)

大房 はつ。(鞭を棄て、平伏す。)

將軍 五郎。此の上問ふべき事もないが、頼朝閩外の職を辱うして、勇士猛卒を惜むこと何物にも譬へられぬ。どうぢや。志を飜して奉公致してくれまいか。

五郎 それは存じも寄らぬ事。若し處刑を宥められて、行住心に任せるなら、某は大房に此の素首すくさくを取らせ申さう。大房が討たいでも、

近き恵に代へられぬ
遠き恨のまつはれば、

いつ謀反人にならうも知れぬ。一しよに死なうと誓うた兄を、久しう待たせるも心苦しい。首刎ねられるを待つ外ござらぬ。(天見に) さあ繩を打たれい。

大見 いや、某は五郎丸が掛けた儘の御身の繩を、君命によつて預り、又君命によつてほどいたばかりぢや。御身に繩打つすべを知らぬ。

將軍 待て、勇士を失ふは遺恨ながら、其の志は奪ふべからず。五郎が繩は頼朝が手づから打つて遣はさう。

五郎 (居直る。) こは思ひも掛けぬ仰ぢや。今生の思出に、さあ御繩を拜領致さう。

將軍 (起つ) わが打つ繩は不動の羅索けんさく、難伏なんふくのそちには、相應あははしからう。いでく。

(階を降らんとす。幕。)

(鷗外全集)

八 天つ星

下河邊長流

大阪の國學者
貞享三年(三三六)
歿
年六十三

下河邊長流

天つ星おちて石ともならぬ間や、

しばし川邊の螢なるらん。

富士のねに登りて見れば、天地は

まだいくほどもわかれざりけり。

釋契沖

梅の花おぼろ月夜にほふなり、

常にもがもな、この頃にして。

野邊のつゆ山のしづくもしかま川、

海に出でてはかはらざりけり。

戸田茂暉

いにしへにあらすきかへせ、言の葉の

釋契沖

國學者
大阪圓珠庵の住
僧

元祿十四年(三三三)
歿
年六十二

しかま川

飾磨川
播磨國飾磨郡の
歌枕

戸田茂暉

歌人

江戸の人
寶永三年(三三六)
歿

荷田春滿

國學者

山城稻荷山の祠

官

國學四大人の一

元文六年(三三六)
歿

年六十九

賀茂眞淵

家號は縣居

國學四大人の一

遠江國濱松の人

明和六年(四一九)
歿

年七十三

をつくば

小筑波

あしほ

蘆穂

共に常陸の名山

道はせまくもなりにけるかな。

ぬれてなく山ほとゝぎす、五月雨の

古巢やおもふ、親やこひしき。

荷田春滿

ふみわけよ、大和にはあらぬ唐鳥の

あとを見るのみ人の道かは。

嵐ふく音もおよばぬ雲の上は、

いかに静けく月のすむらん。

賀茂眞淵

をつくばも遠つあしほも霞むなり、

ねこし山こし春やきぬらん。

秋の夜のほがらくと天の原、

本居宣長

家號は鈴の屋
國學者
伊勢松坂の人
國學四大人の一
享和元年(一八一七)
歿
年七十二

照る月かげに雁鳴きわたる。

本居宣長

日ぐらしに見ても折りてもかざしても

あかぬさくらをなほいかにせん。

島山はつもるも見えずかきくれて

友ぶね白き雪のうなばら。

加藤千蔭

加藤千蔭

家號は芳宜園
國學者
江戸の人
文化五年(一四六八)
歿
年七十四

すみだ川蓑きてくだすいかだしに、

かすむあしたの雨をこそ知れ。

かはほりの飛びかふ軒は暮れそめて、

なほ暮れやらぬ夕顔のはな。

村田春海

村田春海

國學者
江戸の人
文化八年(一四七二)
歿
年六十六

淺間山神のいぶきの霧はれて、

雲ゐに立てる夕けぶりかな。

雪降れば千里もちかし、おばしまの

もとよりつゞく富士のしば山。

小澤蘆庵

小澤蘆庵

歌人
尾張に生れ京都
に住んだ
享和元年(一八一七)
歿
年七十九

波となり小舟となりて、夕ぐれの

雲のすがたぞはては消えゆく。

里の犬の聲のみ空の月にすみて、

人はしづまる宇治の山かげ。

香川景樹

香川景樹

號は桂園
歌人
因幡鳥取に生れ
京都に住んだ
天保十四年(一八四三)
歿
年七十六

うぐひすのあかつきおきの初聲に

今はとしらむ春の夜の月。

鶴見祐輔

前鐵道省參事

明治十八年群馬

縣生

安奉線

安奉奉天間の鐵

道

京奉鐵道

北京奉天間の鐵

道

筏おろす清瀧川のたぎつ瀬に
散りてながるゝ山吹のはな。

九 見知らぬ國

鶴見祐輔

峻嶺雲に迫る朝鮮半島を縦斷し、安奉線を一睡の間に駛り抜け
て、奉天で京奉鐵道の列車に乗換へた瞬間から、旅行者は其の身
の支那大陸に在ることを痛感する。滿目の荒蕪が前後と、そし
て左右とに限なく續く。幾里かの無人の田畑を隔て、點在す
る村落の家々は、黄褐色の土で固めて、死んだ様に黒ずんだ瓦を
戴いて居る。楊の木のみが蒼々と茂つて、一道の生氣を此の籬
落と平原とに與へて居る。見渡すかぎり赤土の平野の間に折
折人の頭のみが見える。その頭は悠々と一定の速度を以て赤

三皇

太昊伏羲氏

炎帝神農氏

黃帝軒轅氏

五帝

少昊金天氏

顓頊高陽氏

帝嚳高辛氏

帝堯陶唐氏

帝舜有虞氏

哈爾濱

滿洲吉林省の都

會

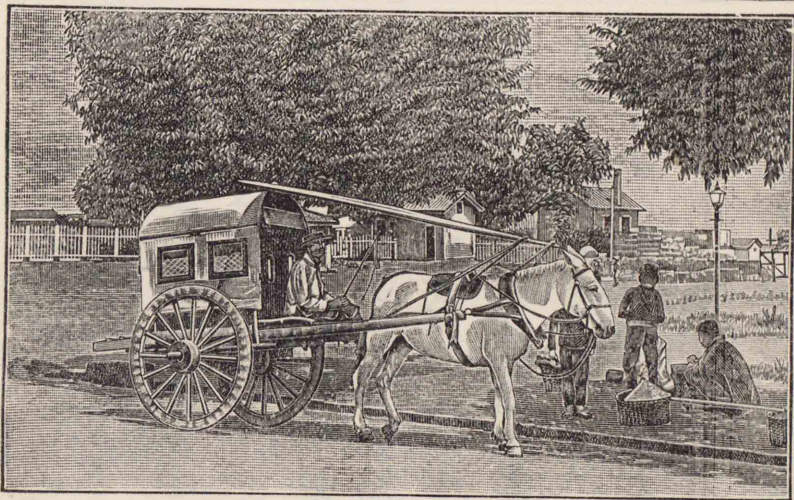
營口

滿洲奉天省遼河

口の港

土の上を進行して行く。汽車の近づくに従つて其の頭の前に
連なる一群の驢馬と馬と牛との姿が見られる。それは低く陥
つた道路である。修繕することなしに幾世紀の使用に任せた
支那道路は、肩を没する程の深さにへこんで居る。其の先祖の
轍の刻んだ險惡な道路の上を、支那の農夫が三皇五帝の昔なが
らに、彈機の無い支那車の上に乗つて、種類の異なる五六頭の動
物を御しながら無關心に駛つて行く。此の茫々たる平原の中
を此の車を驅つて彼等は哈爾濱から營口まで七百哩の道を、こ
く僅かの賃銀で大豆を運んで來たのであつた。
其の無限の曠野、其の底知れぬ忍耐力、支那大陸の自然と人間と
が不可思議の壓力を以て遊子の心魂に迫つて來る。纖麗なる
日本の自然と伶俐なる日本の人間との環境を脱し來つて、一晝

ク
ー
ル
ヴ
ア
ン
Coulvain
(-1915)



夜にして、此の如く大なる自然と人間生活とを見れば、如何にして相互無關心に、相互不感染に存在しながら、三千年の國交を續けたのであらうかと疑はしくなる。支那の環境と支那の文明とを新しき心眼を開いて見ることの必要が沁々と遊子の胸臆に迫つて来る。佛蘭西の女流小説家クルヴァンは彼の女の英國紀行に題して「見知らぬ國」と言つた。廿二哩の海を隔て、二千年の親交

を結ぶ英國と佛蘭西とが互に「見知らぬ國」であつたならば、十二萬方哩の小國たる日本と四百萬方哩の大國なる支那との關係は、更により以上に「見知らぬ國」である。同文同種と言ふ抽象的な概念的な標語に累せられて、日支兩國國民は、あまりに相知つたと自惚れ過ぎた。相似ざる隣人達が、異なる環境に異なる文明を抱いて生活しながら、相似たる者の如くに振舞つた。其の間から幾多の禍が渦巻き起つた。似ざる者の間に起る精神的反撥と物質的乖離とを一時の權宜と半吞半吐の好意とを以て繋ぎ合せようと、大勢の人々が騒ぎ奔めいた。其の焦燥と失望と憤懣との凡ての記録の外に超然として、支那の農夫は昔ながらに五頭の動物を驅りつゝ、深さ丈餘にも及ぶ支那路の上を悠々と大豆を運んで行く。

紀文大盡
紀國屋文左衛門
徳川時代の富商
享保十九年(二五
〇)歿
年六十六

山海關
支那直隸省の東
端
萬里長城の起點
秦皇
秦の始皇帝

停車場に車の駐まる度毎に、旅客はプラットホームにおり立
つて見馴れぬ光景を凝視する。四尺程の毛布の巻いたのを肩
にして、黒ずんだ地の垢に穢れた着物を着、群集を押しつけ突飛
ばしながら来るのは支那人の乗客である。耳も聾するばかり
大聲に喚き立て怒鳴り立て、やむこと無きは物賣である。未
だ富を爲さざりし幼年時代の紀文大盡が竹製蜻蛉を賣歩いた
様な恰好をして、小串の尖端に小さい白綿を着けたのを十幾本
も藁の棒に刺してふらりと車窓の外を歩いて居る子供は、
耳搔賣である。其の喧騒と雑沓と不統一との壓巻として、黒帽
黄線の巡警がけろりかんと立つて居る。
車が山海關に着く時分には、初夏の陽はとつぷりと「天下第一關」
の後に落ちて、秦皇の覇圖と現代支那の混沌とが遊子の心眼の

中へのみ甦つて来る。(思想山水人物)

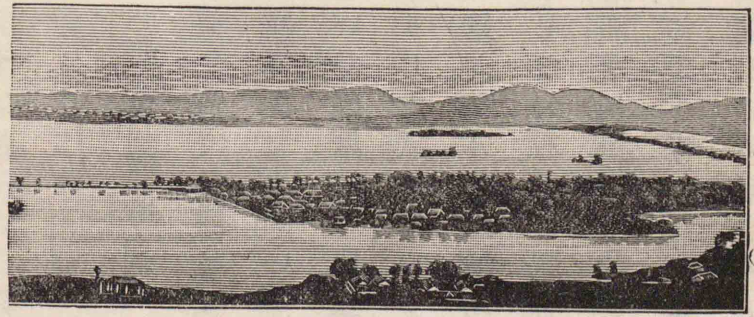
一〇 西湖の遊

河東碧梧桐

河東碧梧桐
名は秉五郎
俳人
明治五年愛媛縣
松山市生
杭州
支那浙江省杭州
府

杭州に下車して晝飯を済まして後、すぐ洋車を吳山の麓まで驅
つた。きたない狭い民家の間から上り始めて少し小高い丘の
上に出ると、そこに杭州城を半圓に遠く巻いた錢塘江の眺望が
あつた。風も吹かないので、爽快な、すつきりした氣持になつて、
始めて足下にたゞ白壁を塗重ねたとしか見えない杭州城内の
建築と、吳山の一角の出張つた山の磊塊とした岩石との配合が、
錢塘江の水を待つて、一幅の男性的な油繪になる構圖に興を催
すのであつた。日本から渡つた鐘を吊つてゐる寺や、四五臺の
轎子に釣られて來た身分のありさうな女連れの寺參りなどを

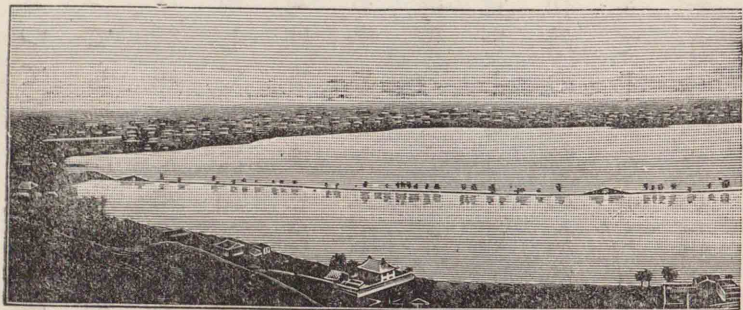
見ながら、なほ四五町も上ると、今度は右に雷峰塔と西湖の東南の一部とを見おろす眺望に逢着した。西湖の中には大小二つの島がある。それが正しい圓さである上に、葉の茂つた柳でぐるつと水を區切つてゐる。ぼうと霞んだ、靜かに湛ひた水に、しだれた柳が落着いた柔かな味を添へてゐる。支那にもこんなまどまつた景色があるのだと、物憂さとだるさとかから目覺めた私は、山を下りてから、城内をぶらつく足もとも明るく力づいたものになつた。



西

バンド
Band
帶の義
こゝは細長
い湖岸通

城内の西湖に瀕する處は、昔の城壁が取壊されて、外國人の租借地を眞似た四五十呎の押開いたバンドが、ずつと一直線に凡そ一哩の長さに出來てゐる。そこには三四階の支那宿が西洋式の窓を開いて軒を並べてゐる。旅人の宿泊心を唆る。まるで避暑地の海岸の氣分だ。廣東の城内から租借地の沙面に歸つたやうな沈痛な靜かさでなく、落ちついた杭州城内から此の湖邊のバンドを行く心持には、華やかな靜かさと蟠りのない輕快さが漂つてゐた。私たちはこの

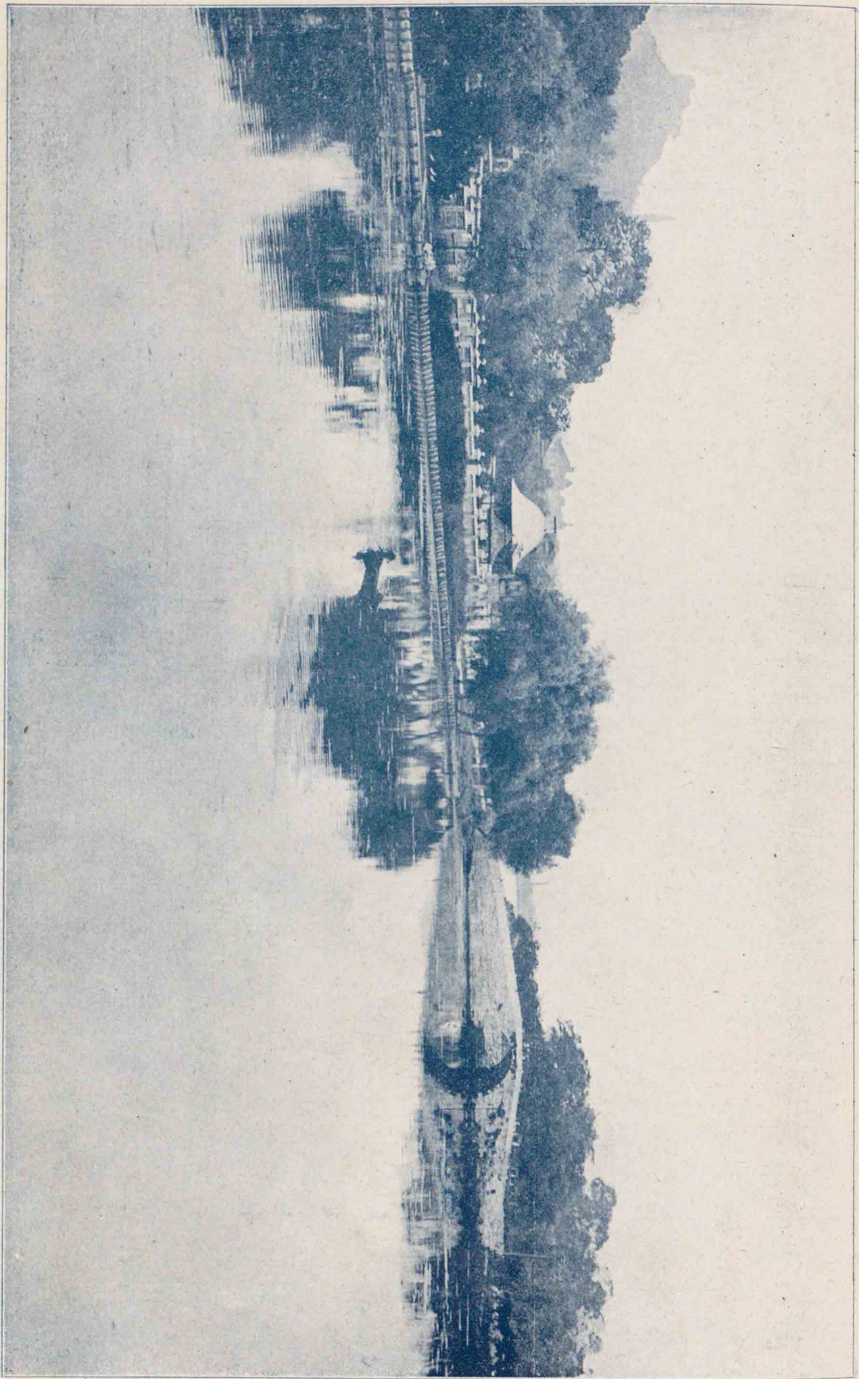


湖

バンドを洋車で駆けぬけて、湖の北側に立つて居る新々旅館といふ支那旅館に入った。支那旅館と言つても瀟洒な煉瓦造で、玄關をはいつた廣間に球臺のあるやうな行届いたホテルなのだ。私たちは其の湖に面する一室を占領して、ゐながら西湖の眺望を擅にする豫定であつたが、其の豫定はまんまとはづれて、鶏や豚を飼放しにしてある内庭に面する奥まつた二階の一室をあてがはれ、そこに行李をおろすべく餘儀なくされた。

兎も角も日のある中に出来るだけの遊覧をしようといふので、旅館前からすぐ小舟をうかべさせて、林和靖の故跡の放鶴亭や、岳飛廟を經めぐつた。舟はやつと四人までしか載せられないボートの舳艫の詰つたものだ。船夫は杓子の大きい櫂を執つて船尾に腰掛けて操縦する。日覆ひの白い布は船の長さだけ

林和靖
名は述
宋の高士
岳飛廟
宋の忠臣岳飛を
祀つた廟舎



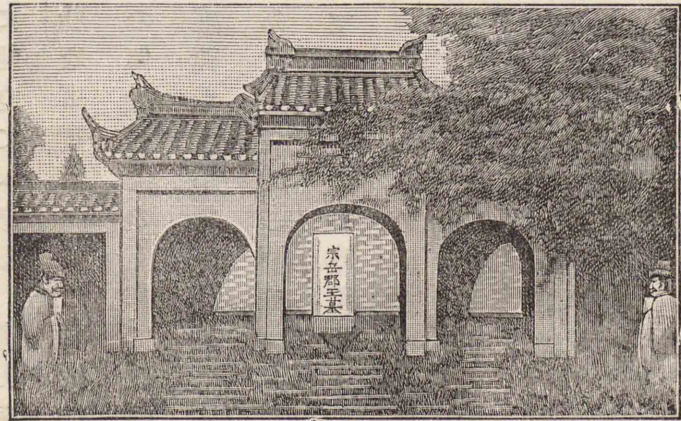
蘇小々
一名は簡々
南北朝時代の女
詩人



放鶴亭

張つて、四人の座席は籐椅子で手輕に組立てゝある。青史を血に染めた悲壯な事實も、高風の萬世に仰がれる隱逸の傳説も、今の支那では遺憾ながら何の感興も惹かない、故蹟の外形は殘存してゐても、故蹟の情味は疾くに泥土に委してゐる。放鶴亭、蘇小々の墓、岳飛廟、岳飛の墓、それらの過去の史傳の傳へた強烈な感興と、現在の故蹟の示す落莫たる光景の餘りにかけ離れた相違、それを仔細に觀てゐるには堪へられなくなる。果ては今昔の感とでもいふものか、うら悲しく、涙ぐましくなる。それよりも此の一葉の舟を湖中に浮べて、滑かな水の上を何處を指すとも

なく漂つてゐる方が、せめてもの林和靖の高風を今に實現するといふものだ。實際湖中に漂つてゐると、氣は澄み胸は開ける。支那慢遊の外客といふやうな氣分も、或はこの大陸の興亡の瀬戸際といふやうな心持も、總べて忘れられて、洗ひ落されて、たゞこの自然と我とが融會してしまふやうな氣がする。馬鹿にいゝ氣持になつて、日のくれぐれに宿に歸つて來た。龜の甲を仰向けにしたやうな支那風呂ではあつたが、



岳飛の墓

清風徐來
蘇東坡の前赤壁賦の句
月明星稀
「月明星稀、烏鵲南飛。」（魏の曹操の短歌行）

湯を浴びることの出來たのも意外なことだつた。夜に入ると珍しくいゝ月だ。私たちは晝間の扁舟に坐して、東坡堤の水門を潜つて、ひろくとした湖面に出た。晝間は彼方此方に白い日覆ひが、さも鷗でも浮んでゐるかのやうに往來してゐたが、今はどう見通しても舟らしい影は目に入らない。ただ東岸のバンドに立並んだ旅宿の燈が、漁火のそののやうに水にきらついてゐるのみであつた。「清風徐來、水波不起」とか、月明星稀とかいふやうな文字は、たゞさういふ文字として目に映るが、その文字の齎す詩人の胸裏には突入し得ない、それも今日の支那の國情では已むを得ない、自然であるかも知れないと、舟中の外客二人は妙に大人びた氣になつて、この清風明月を我が物顔に振舞つてゐた。

兎も角あのバンドに上つて、更に一杯の酔を買ふのも一興では
ないかといふことになつて、船首をその方に向けた。烏鵲南に
飛ぶと言つたやうな夜空が、しいんとして飽くまで静かさを押
しつけてゐる。くつきりした西の山なみは、晝間よりもずつと
あとじさりしたものゝやうに、我等からかけ離れてしまつた。
尊い寂しさが折ふしの漣に連れてひし／＼と私たちの胸にし
み込むのであつた。(支那に遊びて)

一一 佐那田餘一

兵衛佐殿仰に、武藏相模に聞ゆる者どもは皆ありと覺ゆ。中に
も大庭俣野兄弟先陣と見えたり。此等に誰をか組ますべきと
宣へば、岡崎四郎義實申しけるは、弓矢を取つて戦場に出づる程

兵衛佐
前右兵衛權佐源
頼朝
大庭
大庭三郎景親
俣野
俣野五郎景久
岡崎四郎
三浦介義明の弟

義忠
佐那田餘一義忠
岡崎四郎義實の
子

の者、敵一人に組まぬ者やは侍るべき。親の身にて申す事、人の
嘲を顧みざるに似たれども、存ずる所を申さざらんも却て又私
あるに似たるべし。義忠は此の間大事の所勞仕つて未だ力づ
かずや侍らめども、心しぶとき奴にて、弓矢取つては等倫に劣る
べからず。其の器にはべり。仰せ含めらるべきか。と申しけれ
ば、やがて義忠を召してけり。

餘一、其の日の装束には、青地の錦の直垂に、赤緘の肩白の鎧の裾
金物打つたるを着て、つま黒の箭負ひ、長覆輪の太刀を佩きけり。
折烏帽子を引立て、弓を平め、跪きて將軍に平伏せり。白葦毛な
る馬をぞ引かせたる。其の體、あたりを拂つてぞ見えし。兵衛
佐、佐那田に宣ひけるは、大庭俣野は名ある奴原なり。今日の軍
の先陣仕つて、彼等二人が間に組め。源氏の軍の手合なり、高名

せよ。とぞ宣ひける。

餘一仰を蒙り、畏つて御前を立ち、郎等に文三家安と云ふ者を招き寄せて、義忠が母又子どもが母にも語るべし。とて云ひけるは、『一昨日打出てしを最期と思ひ給ふべし。兵衛佐殿、今度の軍の先陣勤めよと直に仰せたびたれば、多くの人の中に擇ばれたる事、弓矢取る身の面目なり。されば命を限に戦はんずれば、生きて再び歸る事よもあらじ。豫て斯くと知り侍らば、何事も申し置くべかりけり。其の事今は力無し。我討たれぬと聞き給ひなば、母御前の御歎こそ思ひ残し奉れ。縦ひ我死したりとも、世の静まらん程は、二人の稚き者をば如何ならん野の末、山の奥にも隠し置きて、佐殿の世に立ち給うたらん時、先祖なれば岡崎と佐那田とをば申し賜はりて、兄弟に知らせてたび候へ。さては

岡崎と佐那田
共に神奈川縣中
郡にある

女房も子供が後見しておはしませ。佛に花香進らせて、後の世弔ひ給へ。父岡崎殿も佐殿の御供なれば、軍の習生死を知らず、女性は何事か有るべきなれば、斯く申し置くなり。と慥かに云ひ傳ふべし。又汝も稚き者ども不便に育て、世にあらば憑め、世になくば憫みて義忠が形見とも思へ。など云ひければ、文三申しけるは、殿の二歳の時より、家安親代となつて、夜は胸に抱へ奉つて夜もすがら勞り、晝は肩にのせ日ねもすに育み奉る。早く成人し給うて人に勝れ給はん事を願ひき。五六歳になり給ひしかば、竹の小弓に小竹矧の矢、的草鹿くじか、とこそ射れ、かくこそ射れ、馬に乗つてはとこそ馳すれ、かくこそ馳すれと教へ育て奉りぬ。殿は今年二十五、家安五十七に罷り成る。若き人だに主命とて先陣を蒐けて死なんと宣ふ。殿を見捨て、家安が生きのこりて

は何かせん。又人の言はん事こそ恥かしけれ、佐那田餘一の最期には恥ある郎等身に副はず。文三家安が如何程命を生きんとてか最期の軍に主を捨て、逃げたりけん。」と申さんことも口惜し。死なば一所の討死なり、左様の事をば誰にも仰せられよかし。」とて、三郎丸といふ童を招き寄せ、申し含めて遣はしけり。餘一既に打出でければ、佐殿は義忠が装束毛早に見ゆ、着替へよかし。」と宣へば、餘一は弓矢取る身の晴振舞、軍場に過ぎたること候まじ、尤も願ふ所に侍り。」とて、十五騎の勢を相具して進み出でて申しけるには、源氏世を取り給ふべき軍の先陣承つて蒐出でたるを誰とか思ふ。音にも聞くらん、目にも見よ、三浦介義明の弟に本は三浦悪四郎、今は岡崎四郎義實、その嫡子に佐那田餘一義忠、生年二十五。我と思はん人々は組めや。」とて叫んで蒐

く。弓手は海、馬手は山、暗さは暗し、雨は射に射て降る、道は狭し、馬にまかせてぞかけ行きける。

平家方より、餘一は善き敵ぞ、餘すな。」とて進む者共には、大庭三郎景親、俣野五郎景久、長尾新五郎、新六、八木下五郎、漢楊五郎、萩野五郎、曾我太郎、原宗四郎、澁谷莊司、瀧口三郎、稻毛三郎、久下權頭、淺間三郎、廣瀬太郎、岡部六彌、太同彌次郎、熊谷次郎等を先として、究竟の兵七十三騎、佐那田一人に組まんとて我先に我先にと逸れども、暗さは暗し、道は狭し、馬次第にぞ打つたりける。

二十三日の黄昏時の事なれば、敵も味方も見え分かず。餘一は文三を呼んで、家安慥かに聞け、我は相構へて大庭、俣野が間に組まんと思ふなり。組む程ならば急ぎ落合ひて敵の首を取れ。

此の間の勞りに力無く覺ゆれば、豫て云ふぞ。」と云ふ。文三「誰も

二十三日
治承四年(一一八四)
八月二十三日

さこそ存じ候へ。殿の大庭に組み給はゞ家安は俣野、我大庭に組み候はゞ殿は俣野に組み給へ。とて進む處に、岡部彌次郎、餘一組まんと志して、鹿毛なる馬に乗つて馳來る。餘一は岡部とは思ひ寄らず、大庭か俣野かと思ひ、馳寄りて兜の天邊てに手を打入れて、鞍の前輪に引付けて頸を搔き、取上げて雲透きに見れば、思ふ敵にはあらずして岡部彌次郎なり。「あな無慙や、鹿待つ處の狸とは此の事にや。何しに來つて義忠に打たるらん。」とて、首をば谷へぞ投入れける。

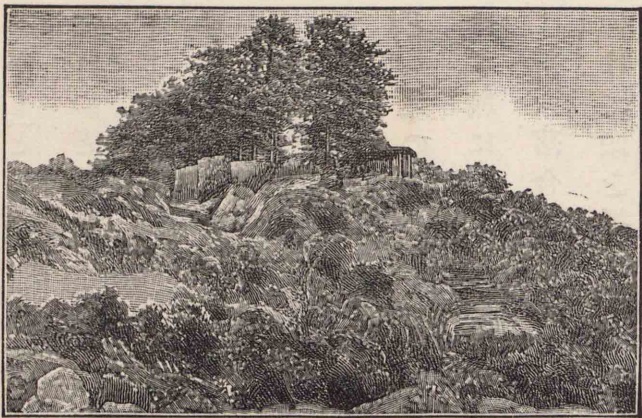
餘一が乗つたる馬は、白葦毛太く逞しきが七寸に餘りて、鼻の先、瓠の花の如く白かりければ、名をば夕顔と云ふ。東國一の強馬なり。もと三浦介が許にありけるが、餘りに強くてたやすく乗る者無かりけるを、岡崎所望して乗りけるが、それも進退し煩ひ

たりけるに、餘一ばかりぞ乗從へたりける。されども岡崎持和げて三浦へ返したれば、本の栖處へ歸つたりとて、都返りと名づけたり。佐那田折節馬無くて又乞返したれば、古巢へ歸つたりとて、鶯とも呼びけり。元來強き馬なりけれども、己が力を憑みつゝ、出雲轡の大きなるに手綱二筋差合せてぞ乗りたりける。岡部彌次郎が首切りける時、鎧武者の身の落つるに驚きて、つと出でて走り行く。さる者ぞと心得て、引留めんくとしけれども、此の馬の癖として、口をば主に打ちくれて胸にて走る馬なりけり。猶留めんと引く程に、手綱三つに切れければ、左右の水付執へたり。左右の水付引きもぎて、心の儘に引きて行く。大庭三郎は弟の俣野五郎に「構へて餘一に組み給へ、景親も目に懸らば組まんずるぞ。」と云ふ。俣野は「餘りに暗くて敵も味方も

四段
一段は六間か

見えわかず、餘一も何處やらん」と云へば、餘一が鎧は裾金物の殊にきらめきて、馬の毛も白かりき。白き幌を懸けたりつれば、著しかりつるなり」と教ふ。俣野馳出でぬ。餘一馬に引かれて近づきたり。俣野敵の寄すると思ひければ、佐那田餘一義忠と名乗りつるは落ちぬるか」と呼びけり。無下に近かりければ、義忠此處にあり。問ふは誰ぞ。「俣野五郎景久」と名乗るや遅き、押並べて馬の間へ落重なる。上になり下になり、驛返し持返し、山の岨を下りに大道まで四段ばかりぞ轉びたる。今一返しも轉びなば、互に海へは入りなまし。

俣野は大力と聞くに、如何したりけん下に推附けられてうつぶしに臥し、頭は下に、足は上に、起きんくとしたれども力無かりける。餘一は上にひたと乗りえて、義忠敵に組みけり、落重なれ、



佐那田餘一俣野五郎組の遺蹟

落重なれ」と呼びたれども、家安を始として郎等ども押隔てられて續くものなし。俣野今は叶はじと思ひて、景久、佐那田に組みたり。續けやく」と呼びけるに、長尾新五聲につきて落ちあひて、上や敵、下や敵」と問ふ。餘一は上に乗りながら、「斯く宣ふは長尾殿か。上ぞ景久、下ぞ餘一、過ちし給ふな」と云ふ。俣野下にて、上ぞ餘一、下ぞ景久、過ちすな」と云ふ。頭は一所にあり、暗さは暗し、聲は息突きて分明に聞分かず。

上よ下よと論じければ、思ひわびてぞ立つたりける。

俣野「あな不覺の殿や、聲にても聞知りなん。鎧の毛をも探り給へかし」と云ふ。長尾誠にと思ひて鎧の毛をぞ探りける。餘一顯れぬと思ひて右の足を揚げて長尾をむずと踏む。踏まれて下りに弓長三杖ばかりとゞ走りて倒れにけり。その間に餘一刀を抜いて俣野が首を搔く。搔けども搔けども切れず、刺せども通らず。餘一刀を持揚げて雲透きに見れば、鞘卷の栗形缺けて、鞘ながら抜けたりけり。鞘尻くはへて、抜かんくとしけれども、運の極みの悲しさは、岡部彌次郎が首切つたりける刀を拭はず、鞘に差したれば、血詰りして抜けざりけり。長尾新五が弟に新六落合ひて、餘一が胡籙やまゆひの間にひたと乗得て、兜の天邊を引仰けて頭を搔く、無慙といふもおろかなり。

俣野を引起して、「いかに手や負ひたる」と問へば、「首こそ重く覺ゆ

栗形
下緒を通す處

れ」と云ふ。顎を探ればぬれくとあり。手負うたるにこそとて、餘一が刀を見れば、鞘尻一寸ばかり碎けたり。強く刺したりと覺えたり。その後俣野は軍はせず、佐那田餘一は俣野五郎止めたり」と叫びければ、源氏方には惜みけり、平家方にはこれを悦びけり。(源平盛衰記)

一二 雲の歌

土井晚翠

ゆうべは崑崙の谷の底
けさは芙蓉の峯の上
萬里の鵬の行末も
かけり窮めん、路遠み
無限の嵐わが翼

土井晚翠
名は林吉
英文學者
詩人
第一高等學校教
授
明治二年宮城縣
仙臺市生
崑崙
支那西部の山脈
芙蓉
富士山が八葉の
蓮華に似てゐる
のでいふ名

空の大海わが旅路。

空の大海星のさと、
緑をこらすたゞなかに、
かゝる微塵の影ひとつ、
見るく湧きて幾千里
あらしを孕み、風を帯び、
光を掩うてかけり行く。
いかづち怒り、風狂ひ、
山河もどよみ震ふとき、
天濤高く傾けて

下界に注ぐ雨の脚。
やめば名残の空遠く
泛ぶ七いろ虹の橋。
曙あけの紫こむらさき
澄みてきらめく明星の
光微かに眠るとき、
覺むる朝日を待ちわびつ、
やがて焰の羽添へて
中ぞら高くのぼし行く。
しづけき夜半の大空に

ほのめき出づる月の姫
下界の花を慕ひつゝ
半ば恥ぢらふ面影は、
ために掩はんわが情、
輕羅の袖と身を替へて。

照りて萬朶の花霞、
花にも勝る身の粧、
あるは歸鳥の影吞みて
ゆふべ奇峰の夏の空、
海原遙か泛びては
紛ふ白帆の影寒く。

奇峰
春水滿二四澤一
夏雲多二奇峰一
秋月揚二明輝一
冬嶺秀二孤松一
(陶淵明)

織ればわが文春の波、
染むれば巧み、秋の野邊、
羽蓋凝りて玉帝の
御駕空に駐るべく、
錦旗かへりて天上の
御遊ごまの列の動くべく。

跡こそ替れ、替りなき
自然の工みわが匂、
嶺に鬨く夕暮は
天女羅綾の舞ごろも、

斷片風に流れては
われ晴空の孤月輪。

影縹渺の空遠く

ゆふべいざよふわが姿、

無心のあとは有情の

誰が高樓たかどの眺めぞや。

珠簾かすかに洩れいでて

咽ぶつま琴ねも細く。

千仞高ききりぎしの

嶺に峙つ松一本、

緑の枝に寄りかゝり
風の袂を振ふとき、
鳴く音すみて來るたづに
貸さん今宵の夢の宿

岸の柳ともろともに

水面みづに影を宿すとき、

江山遠き一竿の

不文のひじり何と見ん。

思は清く、身は軽く、

自在はわれに似たる身の。

第三卷

姉崎嘲風

名は正治
宗教學者
文學博士
東京帝國大學教
授
明治五年京都生
友
高山樗牛

自然の姿とこしへに
われは昨日の我ながら、
嗚呼函關の紫も
昔のあとぞ遙かなる、
帝郷遠し影白く
泛べば慕ふ友やたれ。(明治大正詩選)

一三 忘れ難き日

姉崎嘲風

嗚呼、忘れ難き此の日かな。思へばはや五年の昔春光麗かに南風薫ずる日、友に擁せられて家を辭し、故國に別れしは恰も今日の此の日なりき。帽を振れる客、巾を翻せる友、船上艇中相隔りては面も定かならず、姿も終には見分かぬ迄に消え失せぬ。「健

清見潟
静岡縣興津の海

三月
明治三十三年

在なれ。「再び早く相見ん」との別の言葉は尙耳に響き、最後の握手今尙掌に感ぜられつゝも、見わたせば白鷗飛びかふ海的面渺として、埠頭の家屋、故國の山河、已に霞の中に入りなき。嗚呼、かくて相別れたる我が友、今何處にかある。彼はその夜、西の方足柄を過ぎて清見潟のほとりにさすらひ來り、恰も此の海樓に宿りて離別の悶を遣りしなり。月は去り日は逝きて五年後の今日、此の日、我は來りて此の海樓にあれど、彼は既に世を謝して復相見んに由なく、我をして孤影蕭然欄に憑りて無限の感に沈ましむ。

三月君が西航の首途を横濱に送りたる日、予は西の方函嶺を踰えて駿州に入り、清見潟の海樓に宿りて離別の悶を遣りたりき。其の夜月明かに星稀に、一灣の風光恍として夢の如し。

有渡の山
 静岡縣安倍郡久能山の別稱
 袖師の松原
 三保松原の一部
 埋骨の地
 静岡縣安倍郡不二見村龍華寺

中宵欄に憑りて靜かに君を思ひ、うたゝ人生遭逢のはかなきを歎きぬ。

人生遭逢のいとはかなきを歎じたる彼、今や我を此の世に残し、獨り我をして離合の泡沫に似たるを歎かしむ。見渡せば有渡の山影かすかにして、袖師の松原、雨におぼろなり。彼が埋骨の地、彼が夢遊の山川、すべて暗澹の中に包まれて、海面亦死せるが如し。此の海、此の地、是、彼が久戀懷慕の處なりき。此の夜、此の風光、是、彼が銷魂の種たりしこと幾度ぞ。山海舊の如く、風光昔の儘にして、彼が友は已に歸り來つれど、彼と其の姿とは今や尋ぬるに由なし。昨は彼が墓邊の櫻花散りかゝる寒水石の碑を撫て、今夜、五年前の今日の別離を偲んで、彼が遺文に對す。嗚呼、我此の流轉の世に處し、此の友なくして如何にしてか憂懷を



龍華寺から見た富士山

遣らん。

されど徒に憂ふるを已めよ。人に百歳の齡なく、世に別離なき人はあらじ。生死は世の常なり。別離は却て懷慕の樂みを深からしめ、懷慕は時と處との隔を越えて神相接せしむ。友こゝにあり、悠久の夜亦こゝにあり。彼が遺文餘薰新にして、我が思慕日毎に彼に通ず。清見灣頭、今宵雨しめやかにして夜靜かなり。形は見えねど

彼は我と語り、我は彼に接し、松風濤聲亦時に款晤くわむに入り来る。
嗚呼平生憂を同じうせる君と予と、先世何の契縁けいげんかある。身世
匆忙むつぼうとして相移り、際遇さいぐ已に相異なり、生死幽明相隔つと雖も、彼
と我と長へに相伴はん。

歲月水と流れ去つて五年の昔を今に返す由なけれども、神相接
しては生死路相隔てず。三世一心の中に融け來つては、彼も我
も人相異ならず、靈相同じ。人里には燈火已に影を收め、清見瀉
の山海亦眠らんとす。雨よ降れ、夜よ暗かれ、有渡山下、友の墓邊
に風靜かなれ。而して我は此處に我が友と相語りつゝ、今宵一
夜の眠に入らん。(停雲集)

一四 友に寄す

高山樗牛

高山樗牛
名は林次郎
評論家
文學博士
山形縣鶴岡の生
明治三十五年歿
年三十二

友
藤井健治郎

如何濟暮しなき世にや此方お愛らす
碌々羅在小間餘事をわがら濟安心下され
たぐ此頃も事に終れぬ毎沙汰り
打過ぎ外毎度勝手の手のみ濟頼
申上げ申面倒察入徹徒然の折に
物ほきまき色々注文申之れども實
際手にとるは終り申座外水彩畫も
描きみんとて先頃繪具など取寄らせ

魚見崎
熱海の南端に
ある岬
真鶴崎
神奈川県足柄下
郡にある岬
熱海の東北三里
餘

こども是また手に觸さず小顧られど我な
から倅くも暮しつるをれと思われ小
へどをそれめくをなかくに樂しく過し
申候
小生の室は熱海中トモ小く最も眺望ちやうぼうよき處
にて魚見崎より真鶴崎までまがら護眸まがらの裏
よ萃あはまの朝日影さし入る頃に起き出でて
九時頃より濱邊を散歩致し午後は

ハイネ
Heine
(1797—1856)
獨逸の詩人

園藝大工等に費まの毎々此例このよは時
に一卷のハイネ集を携へて山腹の芝原
に仰臥し大海の浩蕩小恙して朗吟する
こどもは座まの或は日暮の空ひとり磯邊乃
松に腰お懸垂て夢ともなく現まともなき思
に耽たるともこれあり倅まや自然の無盡
藏くらなる今はた驚かるまのりに古座まを
我も人を自然まと口まにこそは言へ幾人か

其の真意を會得したるや、天の響地の響思ひ見るだよ高く深く徹せよその感ぜる人の心は如何ばかり高く深きを此に叶へまやうく夕日影も名残なく暮を果て、渾火ほの見ゆる頃小相成候へばざんざくの波音のみ高く相成り水と空と此別も消えて天地を一つになせしらんと思はるゝころ夜は眠のた免に造らざたるものにあらざとあ

笹川 笹川隆風
姉崎 姉崎正治
大橋 大橋乙羽
熊谷 熊谷五郎

詩人此言葉の今更小思ひ出でられ候
去年の暮より二三日前までは月色殊の外
めでたくあかず夜をふりて打眺免申候
元日の夜を十七夜なりしゆゑ月の海を出
づる頃小生の宿に笹川姉崎大橋熊谷の
諸氏と共に觀月の小宴を張り申候ひま
一昨日の夜九時頃まで候ひん林し
就のんとてはあらざ窓の洞より海邊をな

がめおへが缺月をうら一箇むかき海と離れ
 言ふまじりなくめでたき景色をくわひか
 ば下女に命じて雨戸をあきさせ欄より
 よりてハイネを朗吟致其時の心地よき
 あはれわれこのまゝ石も金にもなすか
 思われゆひき
 貴兄等ハさぞか一日と涉勉強の由事なら
 んと羨かの申 茲時ふと涉文賜ひはつ

し病氣も大方を寛く一箇中心配下き
 るまじり候申上げたき事山におきあ
 り能へどもまづこれより筆をとめ候

(樗牛全集)

紅葉山人

尾崎徳太郎

文學者

東京の人

明治三十六年歿

年三十七

友枝照雄

國文學者

東京外國語學校

教授

福岡縣生

一五 紅葉山人の「鹽原」

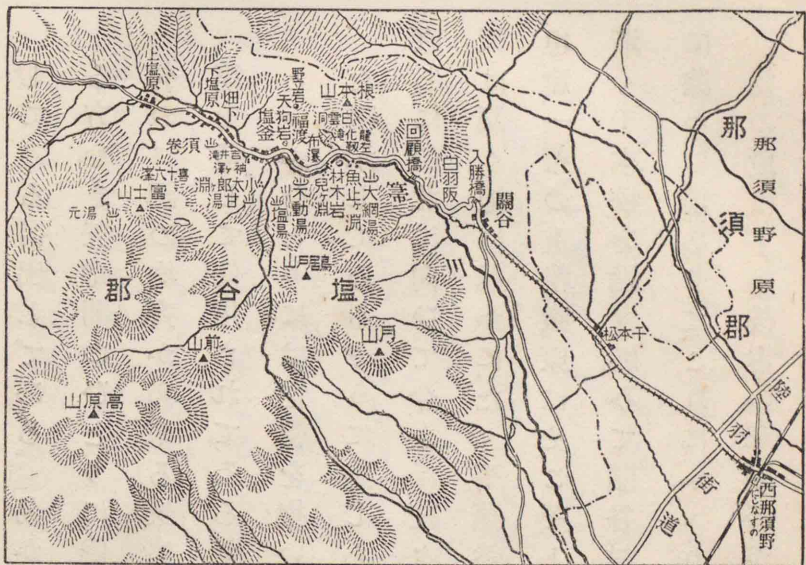
友枝照雄

本文の作者紅葉山人が硯友社を率ゐ、その天稟の才を以て明
 治の文壇に雄飛し、一世を風靡した偉大な力は今更言ふまで
 もない。山人が文を作るに當つての苦心は、五日に一水を畫
 き、十日に一木を畫くといつた古人も遠く及ばない位であつ

那須野原
栃木縣那須郡三
島村及び太田原
から磐城の國境
に至るまでの郊
原

たと傳へられてゐるが、實に言々句々精巧でないものはなく、
絢爛でないものはない。山人の歿後我が文章界が一時船の
舵を失つたやうな混亂に陥つたのを見てもその偉大さは知
るべきである。かくて新文章は生れたものゝその用語の上
に山人の残した遺産は文章史上特筆大書すべきものである。
本文は鹽原の自然を描寫した一文である。先づ上野驛を發
し、汽車中に筆を起し、西那須野驛で下車し、古の那須野原を通
つて鹽原に至り、筆は愈々佳境に入つてゐる。
車は馳せ景は移り、境は轉じ、客は改まれど、我は易らざるその悒
鬱を抱きて、やる方なき五時間のひとりに倦疲れつゝ、はじめて
西那須野の驛に下車せり。
汽車と共に筆が軽く走つてゐるうちに、容易でない技巧の存

してゐる書出しである。「易からざるその悒鬱を抱きてと、や
る方なき五時間のひとりに倦疲れつゝ」とは對句であつて、兩
句の口調の均齊から來る美感を有してゐる。この句法は本
篇を通じて使用されてゐる條件である。「五時間のひとりに」
といふひとりには悒鬱を抱いてゐる主人公の現在のすべて
を暗示してゐるやうに感じられる興味深い言葉である。
直ちに西北に向ひて、今なほ茫茫たる古の那須野が原に入れば、
天は濶く、地は遐かに、たゞ平蕪迷ひ、斷雲飛ぶのみにして、三里の
坦途、一帶の重巒、鹽原はそこぞと見えて行くほどに路は窮らず。
漸く千本松を過ぎ、進みて關谷村に至れば、人家の盡くるところ
に涼々の響ありて、これにかゝれるを入勝橋となす。
此の段は下車後古の那須野が原を通つて、關谷へ三里の一直



線の坦道を進んで愈、鹽原勝地の關門關谷村に達し、村外れの入勝橋を前にして涼々の響に耳を澄ました事を叙須してゐる。「天は潤く云々」は附如何にもよく漢文を活用し近てゐる。一體古體の文は大抵レンズを通して全景を浮き出させるやうな手法をとつてゐるのであるが、山人の筆はその精巧を極めたものである。従つて讀者をして

現實を離れて詩の國に遊ばせるやうな力を持つてゐる。現代口語の新文章が、どこまでも千變萬化する自然そのものを有りの儘に描き、或は自然の精神に立入つて自然の呼吸をその儘にうつし出さうとするのは大分の隔りがある。この點は讀者の特に注意を要するところである。さて入勝橋を渡ると、文は愈佳境に入つてゆくが、そこに山人の文が山海の珍味に舌鼓をうつた後、薄茶一服といふ味をもつてゐることがうなづかれようと思ふ。輒ち橋を渡りて僅かに行けば、日光暗く、山厚く疊み、嵐氣冷かに壑深く陥りて、いくめぐりせる九折の後には密樹に聲々の鳥啼き、前には幽草歩々の花を聞き、愈登れば遙かに木がくれの音のみ聞えし流の水上は淺く見えて、すはやこゝに空山の雷、白光を

放ちて崩れ落ちたるかとすさまじかり。道の右は山を削りて長壁となし、石幽に蘚碧うして、幾條とも白絲を亂し懸けたる細瀑小瀑の珊々として灑げるは、嶺上の松の調も定めてこの緒よりやと見捨てがたし。

車を驅りて白羽坂を踰えてより回顧橋に三十尺の飛瀑をふみて山中の景は始めて奇なり。これより行きて、道あれば水あり、水あれば必ず橋あり、全溪にして三十橋。山あれば巖あり、巖あれば必ず瀑あり、全嶺にして七十瀑。地あれば泉あり、泉あれば必ず熱あり、全村にして四十五湯。なほ數ふれば十二勝十六名所、七不思議、誰か一々探り得べき。

此の段は一句毎に趣が増して、身その地に遊ぶやうに感ぜられ、讀者を酔はせるのである。「九折の後には密樹に聲々の鳥



秋の鹽原

啼き、前には幽草歩々の花を開きに至つては、巧妙な表現の間
に無限の情趣があふれてゐる。「飛瀑をふみて」に車を降りた
ことが分ると共に、自然を愛する心が察しられる。

そも、鹽原の地形たる、鹽谷郡の南より群峰の間を分けて深
く西北に入り、綿々として箒川の流に浜る片岨にして、到る處巉
巖の水を夾まざるなきは宛然青銅の藥研に瑠璃末を碎くに似
たり。先づ大網の湯を過ぐれば、根本山・魚止瀧・左靱の嶮は古り
て、白雲洞は朗かに、布瀑・龍が鼻材木岩・五色岩・船岩などと眺め
行けば、鳥居戸・前山の翠衣に染みて、福渡戸の里に入るなり。

先づ鹽原の地形を述べて景のよつて起るその一般を知らせ
ながら、漸次歩をすゝめて途上の景を簡単な語句に收めつゝ、
福渡戸に入つたのである。「左靱の嶮は古りて、白雲洞は朗か

にの一句には言外の情趣があふれてゐる。「鳥居戸、前山の翠、衣に染みて、福渡戸の里に入るなり。」の一句は實に襟元のすゞしき感じがする表現である。

途すがら前面の崖の處々に躑躅の残り、山藤の懸れるが甚だ興ありと目留まれば、又此の邊殊に谿淺く水澄みて、大いなる古鏡の沈めるが如く、深く蔽へる岸樹は陰々として眠るに似たり。車夫を顧み、處の名を問へば不動澤といふ。

筆をかへして福渡戸に入る間の景を叙してゐる。「大いなる古鏡の沈めるが如く」は興味ある比喩である。「古鏡」といふところに、この溪流の生命が含まれてゐる。

遙かに望めば行路の雲間に塞がりて、咄々何等の物かと先づ驚かさるゝ屏風巖、地を抜く何百丈と見あぐる絶頂には、はらく

と松も危く立ちすくみ、幹竹割に割放ちたる断面は半空より一文字に垂下して岌々たるその勢、幾ど眺むる眼も留らず。「これこそ名にし負ふ天狗巖なれ」と、はるかにも車夫は案内す。

足にまかせて彼の巖の頭上に聳ゆる邊に到れば、谿急に激折して水これが爲に鼓怒し、咆哮し、噴薄激盪して、奔馬の亂れて競ふが如し。寛かに百人を立たしむべき大磐石、風雨に歳經る膚は死灰の色をなして、鱗も添はず、毛も生ひざれと、状恐しげにうづくまりて、老木の蔭を負ひ、急湍の浪にひたりて、夜なく、天狗巖の魔風に誘はれて吼えもしぬべき怪しの物なり。その昔蒲生氏郷此の處に野立せしことあるに因りて野立石と申すと例のが説出す。

福渡戸を過ぎ、足を進めて天狗巖にかゝつたのである。間髪

蒲生氏郷
戦國時代の武將
會津(百萬石)の
城主
文祿四年薨
年四十

を容れない、ひきしまつた筆に讀者を捕へてゐながらも、車夫を點出してくつろぎを與へてゐる。「例のが説出すで軽く筆を收めてゐるなどは剛柔その宜しきを得てゐる作者の筆の力を窺ふべきである。何處でも名所といへば必ず物知顔に説立てる車夫の案内があるものだ。この簡単な語句の中に無限の情味のある想像的内容が含まれてゐる。

率ゐし車に乗りて急ぐ。甘湯澤小太郎が淵など思ひやりつゝ、鹽釜の湯は早くも過ぎて、いつしか畑下戸の里に着きぬ。

白羽坂を越えてから千變萬化する奇景に目を奪はれながら、思はずこゝまで歩を運んだのであるが、神経の端々まで引きしめられるやうな男性的な美景に疲れを覺えたので、再び車を驅つて目ざす畑下戸へ行つたのである。

一村十二戸、温泉は五箇所湧きて五軒の宿あり。こゝに清琴樓と呼べるは、南に方りて箒川の緩くめぐれる磧に臨めり。俯せば水石の粼々たるを見、仰げば西は富士喜十六の翠巒と對して、清風座に満ち、袖の澤を落ちくる流は二十丈の絶壁に懸りて、素練を垂れたる如き吉井瀑となり、東北は山又山を重ねて、琅玕の玉簾ふかく、一望の下、丘壑の富を擅にし、林泉のおごりを窮めらるゝなど、またあるまじき別境なり。

此の段には畑下戸の自然美を述べてゐる。途上の景に比して、そのながめが如何に女性的であるか、思はれると共に、作者のたかぶつた心もこゝで全く落ちついてくるさまが浮出てる。「丘壑の富を擅にし、林泉のおごりを窮め」などは、自然の兒となつて茲に始めて味ひ得る境地である。

我はこの繪を看るごとき清穩の風景にあひて、かの途上嶮しき巖と激しき流との爲に幾度か魂飛び肉消して理むる方なくかき亂されし胸のうちは藹然として頓に和ぎ、恍然としてすべて忘れたり。

まことによくこそ我は來つれ。何ぞ來ることの甚だ遅かりし。山の麗しといふも壤の堆きのみ。川ののどけしといふも水の逝くに過ぎざるのみ。牢として抜くべからざるわが半生の痼疾はいかゞ壤と水との醫すべきものならんと齒牙にも懸けず侮りたりしおのれこそ、まづ侮らるべき愚かのものなれや。

畑下戸の和いだ自然美に接して始めて途中でかきみだされた胸の靜まつたことを叙し、進んで人間の小智慧を弄して偉大な自然の力を馬鹿にしてゐた己が愚かさを顧み、自然の懷

に抱かれることの出來た幸福を語つてゐる。讀者を知らず知らずの中に啓發してくれる尊い力のこもつた言葉である。見よく、木々の緑も、浮べる雲も、秀づる嶺も、流るゝ溪も、そばだつ巖も、吹きくる風も、日の光も、鶏の啼く音も、空の色も皆おのづから浮世のものならで、我はこゝに憂を忘れ、悲みを忘れ、苦を忘れ、勞を忘れて、身はかの雲と軽く、心はこの水と淡し。希はくは今より此の如くにしてわが生を終へんかな。

こゝに至つては最早自然と融和した極致を示してゐる。そのやはらいだ心は言々句々にしみ出てゐる。(現代文十二選講)

一六 東京の顔

加藤 武雄

一杯づつの麥酒と三四品の定食とで簡単な晚餐が濟まされた。

加藤武雄
文學者
明治二十一年神奈川縣生

勘定は高村が拂つた。

「登つて見よう。素敵だぜ。東京の顔が一瞬で見られるんだ。周囲を憚らない大聲でかう言ひながら、早川は先に立つて食堂を出た。而して、案内顔に八階への階段を上つて行つた。

「なるほど、こりやあい。」階梯を上りきつてその露臺に出た時、高村は思はずかう叫んだ。うすら寒い風が耳朶に音を立てて高村の總髪を鬣のやうに吹靡かせた。

「やあ」と、住田も聲を擧げた。

この大都會の中央の、この大都會で最も殷賑な部分に、幾十百尺の高さを以て聳え立つてゐる八階の大層樓は、その頂部に於て廣々と白い石疊を展べてゐた。そこには、ほのかな草花の色を浮べた屋上庭園があつた。椅子・テーブルその日の新聞などを

備へ付け、壁上には二三枚の額などを掲げた休憩室があつた。昇降機の發動機を収めた小さい庫があつた。しかしなほ、優にボールを飛ばすに足るだけの餘地を残してゐるその露臺には、ところ／＼に椅子に囲まれた石のテーブルが置かれ、水色のニスで塗つたベンチが置かれてあつた。そのベンチの一つには銀行員らしい背廣の男が二人、肩を寄合せて、煙草を燻らしながら何か話し合つてゐた。而して、その向ふに、この露臺を縁取る鐵の欄干に兩手をかけて、詰襟の學生が一人立つてゐる外には別に人影も無かつた。

「もう一つ上がある。あそこへ上つて見よう。」と、早川は、休憩室の上になつてゐる圓塔へ、つまり、此の建物の最高部へと、階段を上つて行つた。住田も高村も、ついて上つて行つた。

「見給へ。」早川は、快活な笑ひを浮べながら二人を顧みた。そして叫んだ。

「今、僕等は、恐らく東京中で一番高いところにあるのだ。全東京は、今僕等の足の下に踏まれてゐるのだ。」

「うん。こりやあい。」と高村も弾んだ調子で言つた。

その圓塔は、四方共に硝子張の窓だつた。そして、全東京の大景は、その硝子窓を通じて、潮のやうに、雪崩のやうに、彼等の視野に押寄せて來るのであつた。

「かうして見ると、實際廣いもんだな。いかにも大東京といふ感じがするな。」

と高村は白い額に亂れ懸つた長髪を搔上げながら言つた。

「大東京か。随かに『大』は『大』だな。」と、住田が言つた。憂鬱な住田

の顔にも或昂奮の表情があつた。

それは、まことに壯大な眺めであつた。何方を見ても、眼の届く限、¹波がさまざまの角度で入りまじりながら、遠く波打ち續いてゐた。而して、いろ／＼の色彩を黝黒色の基調に統一した

その薨の波のところ／＼には、或は純白の、或は褪紅色の石造建

築が、或は露臺を以て、或は圓蓋を以て、或は尖塔を以て、周圍を壓

するやうに、一際高く浮び上り、その無数の窓々は、かすかな夕日

の影を、橙黄色に、又は鉛色に反射してゐた。避雷針はいらだた

し、さうに空を突刺し、廣告燈は傲然として立ち、煙突は喘ぐが如

くに煙を吐き、そして、屋根々々の切れ目には、堀割の斷片が水銀

色に光り、街路の一部が白々と現れ、オリーブ色の樹立がぼつり

ぼつりと點を打つたやうに頭を見せたりしてゐた。すべての

ものが皆紛然として、又雜然として、灰色に曇つた空の下に涯も

なく展べひろげられ、その末は天

と地との境目をほかすところの

濛々たる烟塵の裡に、幽かな幻影

となつて消込むのであつた。

家屋の海、人間の海、それはまことに

に廣大な海だつた。そして、その

廣大な海のあらゆる部分から湧

起る潮のやうな物の響は、大地を

揺る遠鳴を以て、この八層樓の頂

まで押寄せて來るのであつた。

すぐ眼の下を走る自動車の音や、電車のベルの音や、程近い東京



大 東 京 の 俯 瞰

驛を今出てゆくらしい汽車の汽笛の音や、さういふ耳近い物音をその中に吸込んで、唯一つの鈍い重いどよみとなつて押寄せて來るその響には、又、大きな動物の呻き聲を思はせるものがあつた。傷つき悩んでゐる何か巨大な動物が、身をもがいて呻いてゐるやうにも聞きなされるのであつた。

「かうして見ると、實際素晴らしいものだなあ。」と、早川は、迫つた眉の下に、炭火の様に輝く眼を睜つて、もう一度ずつと見渡し乍ら、

「おれは、勇氣が挫けて來るときつとこゝへやつて來るんだ。」

こゝへやつて來て、この東京を睨みつけてやるんだ。おれは

一週間もぶつづけにこゝにやつて來て、一日中東京と睨め

つくらをやつた事がある。

「うん、かうして見てゐると、勇氣が湧いて來るな。妙にかう挑

戰的な心持をそゝられる。征服的な野心が起つて来る。と、高村が言つた。彼等は、密闕に兩肱をかけて、南向の窓際の椅子に肩を並べて坐つてゐた。

「さうだ。野心が湧いて来る。勇士が戰場に臨んだ時の様な武者振ひが感じられるんだ。兎に角、僕等の戰場はこれなんだ。僕等が生きるのも、死ぬのも、こゝを措いて外にない。死ぬ迄こゝで戦はなければならぬんだ。俺は、こゝへ上つて来ては、何者に向つてともなく叫びかけるんだ。畜生、俺が勝つか、貴様が勝つか。俺が貴様に征服されるか。貴様が俺に征服されるか。俺はかう言つて呼びかけるんだ。」
早川は興奮しながらかういふのであつた。(東京の顔)

夏目漱石

名は金之助
英文學者
作家
東京の人
大正五年歿
年五十

一七 霧の倫敦

夏目漱石

昨夜は夜一夜、枕もとで、ばちく、いふ響を聞いた。これは近處にある大停車場のためである。この停車場には、一日のうちに、汽車が千幾つか集つて来る、それを細かに割付けて見ると、一分に一列車位づつ出入をする譯になる。其の各列車が、霧の深い時には、停車場間際へ来ると、何かの仕掛で、爆竹の様な音を立てて相圖をする。信號の燈光は、青でも赤でも全く役に立たない程暗くなるからである。

寢臺を這下りて、北窓の日蔽を捲きあげて、そこを見下すと、そこは一面にぼうとしてゐる。下の庭は、芝生の底から、三方煉瓦の堀に圍はれた一間餘の高さに至るまで、何も見えない。たゞ空

Lawn
ロ
ー
ン

Gothic style
ゴ
ッ
ク
式

しいものが一杯詰つてゐる。さうしてそれがしんとして凍つてゐる。隣の庭も其の通りである。此の庭には綺麗な芝庭があつて、春先の暖い時分になると、白い髯をはやしたお爺さんが、日向ぼつこをしに出て来る。このお爺さんは、何時でも、右の手に鸚鵡をとまらせてゐる。さうして自分の目を鸚鵡の嘴でつかれさうな位に近く鳥の傍へ持つて行く。鸚鵡は羽搏きをして、しきりに鳴きたてる。お爺さんの出ない時は、娘が長い裾を曳いて、斷間なく芝刈器械を芝庭の上に轉がしてゐる。この庭も今は全く霧に埋まつて、荒れはてた自分の下宿の庭と何の境もなく、のべつに續いてゐる。

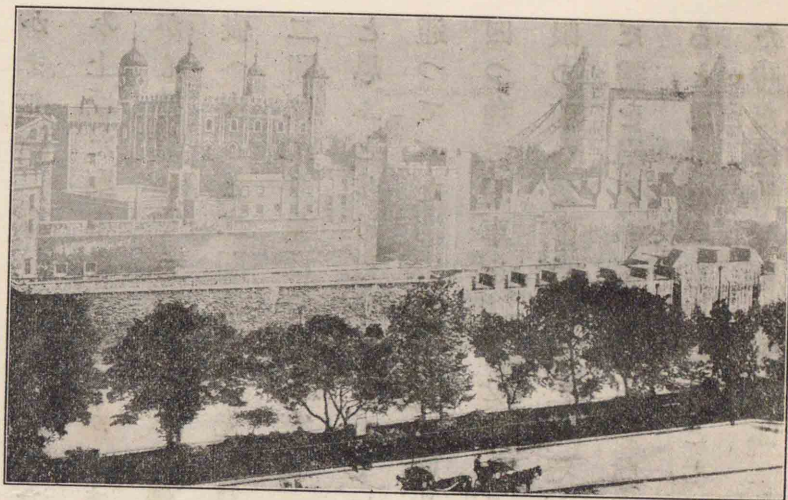
裏通を隔て、^{サビツク}向側に高いゴシック式の教會の塔がある。その塔の灰色に空を刺す時、天邊で、何時でも鐘が鳴る、日曜は殊にや

かましい。今日は鋭く尖つた頂は無論のこと、切石を不揃に疊み上げた胴中さへ、ありかゝまるで分らない。それかと思ふ處が心持黒いやうでもあるが、鐘の音はまるで響かない。

表へ出ると、二間ばかり先は見える。その二間を行盡すと、また二間ばかり先は見えて来る。世の中が二間四方に縮まつたかと思ふと、歩けば歩く程新しい二間四方が現れる。その代り今通つて来た過去の世界は、通るに隨つて消えて行く。

四つ角で馬車を待合せてゐると、鼠色の空氣が切抜かれて、急に眼の前へ馬の首が出た。それだのに、馬車の屋根に居る人は、まだ霧を出切らずにゐる。此方から霧を冒して飛乗つて下を見ると、馬の首はもうぼうとしてゐる。馬車が、行違ふ時は、行違つた時だけ、綺麗だと思ふ。間もなく、色のあるものは濁つた空

ウエストミン
スター橋
Westminster
bridge



霧の倫敦の
 の中に消えて仕舞ふ。漠々として無色の裏に包まれて行く。ウエストミンスター橋を通る時、白い物が一二度眼を掠めて翻つた。眸を凝して其の行方を視詰めてみると、封じ込められた大氣の裏に鷗が夢の様に微かに飛んでゐた。其の時、頭の上で、大時計が嚴かに十時を打出した。仰ぐと、空の中で只音だけがする。用事をすまして河沿の道を歩

いて來ると、今まで鼠色に見えた世界が、突然、四方からばつたり暮れた。泥炭を溶いて濃く身のまはりに流した様に、黒い色に染まつた重い霧が、目と口と鼻とに逼つて來た。外套は抑へられたかと思ふ程濕つてゐる。薄い葛湯を呼吸するばかりに氣息が詰る。足許は穴藏の底を踏むと同然である。自分は、此の重苦しい茶褐色の中に、しばらく茫然と佇んだ。自分の傍を、人が大勢通る様な心持がするけれども、肩が觸れあはない限は、果して人が通つてゐるのかどうか疑はしい。其の時、この濛々たる大海の一點が、豆位の大きさに、どんよりと黄色に見えた。自分はそれを目標に、四歩ばかり歩いた。すると、或店先の窓硝子の前へ顔が出た。店の中では瓦斯を點けて居る。中は比較的明かである。人は常の如くにして居る。自分はや

つと安心した。

こゝを通り過ぎて、手探りをしないばかりに、向ふの岡へ足を向けたが、岡の上には同じ様な横町が幾筋も並行してゐる、青空の下でも紛れ易い。自分は、向つて左の二つ目を曲つた様な氣がした。それから二町程、眞直に歩いた様な心持がした。それから先はまるで分らなくなつた。暗い中にたつた一人立つて首を傾けた。右の方から靴の音が近寄つて來た。と思ふと、それが四五間手前まで來て止つた。それから段々遠退いて行く。仕舞には全く聞えなくなつた。後はしんとしてゐる。自分は又、暗い中にたつた一人立つて考へた。どうしたら下宿へ歸れるか知らん。(漱石全集)

北畠親房

吉野朝廷の忠臣

從一位准三后

正平九年(1014)

薨

年六十三

又の年

延元三年(1190)

顯家卿

親房の長子

延元三年(1190)

戦歿

年二十一

親王

義良親王

後御即位あつて

後村上天皇と申す

男山

山城國男山八幡宮

陸奥の皇子
義良親王

一八 吉野の宮

北畠親房

又の年戊寅の春二月、鎮守府大將軍顯家卿、また親王を先だて申し、かさねて打上る。海道の國々悉く平ぎぬ。伊勢伊賀を経て大和に入り、奈良の京になん着きにける。それより處々の合戦あまた、び互に勝負ありしに、同じき五月、和泉の國にての戦に、時や至らざりけん、忠孝の道こゝにて極りにき。苔の下にも埋れぬものとは、たゞ徒に名をのみぞ留めてし。心憂き世にもあるかな。官軍なほ心を勵まして、男山に陣を取りて暫く合戦ありしかど、朝敵忍びて社壇を焼拂ひしより、事成らずして引退く。北國に在りし義貞も度々召されしかど、上りあへず、させる事なく、空しくさへなりぬと聞えしかば、いふばかりなし。さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子又東へ向はしめたま

顯信
顯家の弟

ふべき定めあり。左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に敘せられ、陸奥介鎮守府將軍を兼ねて遣はさる。東國の官軍悉く彼の節度に従ふべき由を仰せらる。親王は儲の君に立たせ給ふべき旨申し聞かせたまふ。

内の海
霞浦

七月の末つ方伊勢に越えさせ給ひて、神宮に事の由を啓して御船の艤つくりひし、九月の初はじめ、纜つなを解かれしに、十日あまりの事にや、上總の地近くより、空の氣色おどろくしく海上荒くなりしかば、又伊豆の崎といふ方に漂はれしに、いと波風夥しくなりて、數多の船行方知らずなりけるに、皇子の御船は障りなく伊勢の海に着かせ給ふ。顯信朝臣は元より御船に候ひけり。同じ風まざれに、東を指して、常陸の國なる内の海に着きたる船ありき。方々に漂ひし中に、この二つの船、同じ風にて東西に吹分けらる。

舊都
京都
光明院おはす

末の世には珍らかなる例にぞあるべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙チノの御住居ミヤノも如何と覺えしに、皇太神のとゞめ申さしめ給ひけるなるべし。後に吉野に入らせましく、て、御目の前にて天位を嗣がせ給ひしかば、いと思ひ合せられて尊くもあるかな。又常陸はもとより志す方なれば、御志ある輩相計らひて、義兵こはくなりぬ。さても舊都には、戊寅の年の冬改元して曆應とぞいひける。吉野の宮にはもとの延元の號なれば、國々も思ひくゝの年號なり。唐土カラコにはかゝる例多かれど、此の國には例なし、されど四年にもなりぬるにや。大日本島根は固より皇都なり、内侍所ウチノツボ神璽カミツバも吉野におはしませば、いづくか都にあらざるべき。さても八月の十日餘り六日にや、秋霧に冒されさせ給ひて、かく

霜月 正平二年(1007)十一月

この時楠木正行が山名時氏を攻めて打破り細川顯氏も續いて敗走した

阿倍野

攝津國天王寺より住吉までの野今は大阪市の内

渡邊の橋

今の大阪市天満橋天神橋の間にあつたといふ

四條繩手

河内國北河内郡四條村

兩度の合戦

河内國譽田林の戦と攝津國阿部野の戦

將軍

足利尊氏

左兵衛督

足利直義

一九 如意輪堂

阿部野の合戦は霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋よりせき落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、河より引上げられたれども、秋の霜、肉を破り、曉の氷、膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱替へさせて身を温め、藥を與へて創を療せしむ。此の如く四五日皆勞りて、馬に乗る者には馬を引き、物具失へる人には物具を着せて、色代してぞ送りける。されば敵ながらその情を感ずる人は、今日より後、心を通ぜんことを思ひ、その情を報ぜんとする人は、聽て彼の手に屬して、四條繩手の合戦に討死をぞしける。さても今年兩度の合戦に、京勢無下に打負けて、畿内多く敵の爲に侵し奪はる。遠國亦蜂起しぬと告げければ、將軍、左兵衛督の

淀

山城國久世郡淀町

八幡

山城國綴喜郡八幡町

共に淀川の左岸にある町

湊川

今の神戸市の内

討死

延元元年五月十七日

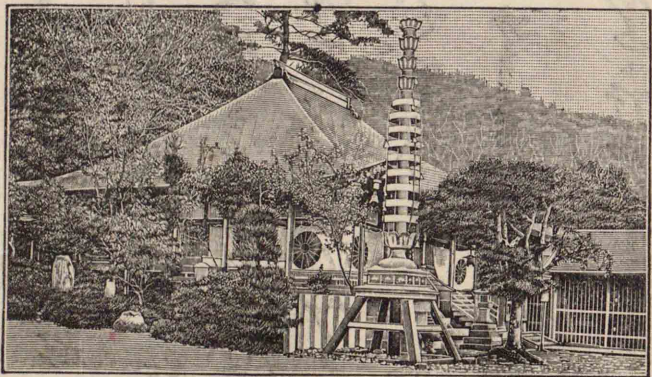
周章、只熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催し勢なんどを向けては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられる。

京勢雲霞の如く、淀・八幡に着きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行、舍弟正時、一族打連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、父正成、庭弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休めまゐらせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候ひし間、危きを見て命を致す所、豫て思ひ定め候ひけるかに依つて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ了んぬ。その時、正行十一歳に罷り成り候ひしを、合戦の場へは伴はで河内へ歸し、死に残り候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡し、君

有待の身
凡夫無常の身

を御代に即け參らせよ。」と申し置きて死にて候。然るに正行正時已に壯年に及び候ひぬ。この度我と手を碎き合戦を仕り候はずば、且は亡父の申し遺言に違ひ、且は武略の言甲斐なき謗に落つべく覺え候。有待の身思ふに任せぬ習にて、病に犯されて早世仕る事候ひなば、只君の御爲には不忠の身となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度師直・師泰にかけ合ひ、身命を盡し合戦仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候か、正行正時が首を彼等に取りられ候か、その二つの中に戦の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らん爲に參内仕つて候。と申しもあへず、涙を鎧の袖に懸けて、義心その氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる先に、まづ直衣の袖をぞ濡されける。

主上乃ち南殿の御殿の御簾を高く捲かせて玉顔殊に麗しく、諸卒を照臨あつて、正行を近く召して、以前兩度の戦に勝つことを得て、敵軍の氣を屈せしむ。叙慮まづ憤を慰する條、累代の武功返す返すも神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戦天下の安否たるべし。進退度に當り變化機に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戦命を下すべきにあらずといへども、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり、退くべきを見て



如意輪堂

筆蹟

鎮守社壇回祿事
殊以驚歎入候但
神體不燒失火中
御坐候條未代之
奇瑞言語道斷候
歎念可經奏聞候
恐々謹言
五月廿六日
正行花押
觀心寺々僧御中

退くは後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす。慎んで
命を全うすべし。と仰せ出
されければ、正行頭を地に
附け、とかくの勅答に及ば
す、只之を最後の參内なり
と思ひ定めて退出す。
正行正時和田新發意舍弟
新兵衛以下、今度の軍に一
足も引かず、一處にて討死
せんと約束したりける兵
百四十三人、先皇の御廟に
參りて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂

鎮守社壇回祿事
殊以驚歎入候但
神體不燒失火中
御坐候條未代之
奇瑞言語道斷候
歎念可經奏聞候
恐々謹言
五月廿六日
正行花押
觀心寺々僧御中

(寶墨徵史) 蹟筆行正楠

の壁板に、各、名字を過去帳に書きつらねて、その奥に

かへらじとかねて思へば、梓弓(いさ、枕詞)

なき數に(死す人々)いる名をぞとむむる。

と一首の歌を書留め、逆修の爲と覺しくて、各、鬢髪を切りて佛殿
に投入れ、その日吉野を打出でて敵陣へとぞ向ひける。(太平記)

二〇 早春の賦

阿部次郎

阿部次郎
哲學者
東北帝國大學教
授
明治十六年山形
縣生

余は一年の中のあらゆる季節を愛する。光と生命とに溢るゝ
夏も、靜かに澄渡りつゝ、鎮まり行く秋も、自然の生命の墓の中に
温かに雪に籠る冬も、盛なるにつけ、寂しきにつけ、靜かなるにつ
け、悲しきにつけ、愁を含むにつけ、快活なるにつけ、漲り溢るるに
つけて、余は一年の中のあらゆる季節を愛する。

併しかくいふは、余の容易に同化し難き季節と、余と最も調子の合ふ季節との差別があることを否定する意味ではない。梅雨の美しさや東京の冬の美しさを感じるには、余にとつては、身心の特に強健で調節された情態が必要である。余の心の痛み易く、感じ易きとき、葉蔭に熟する梅の實の美しさよりも、灰色の空と肌を襲ふ濕潤の氣の厭はしさによつて、凜然たる霜晨の勇ましさよりも、裸なる土と梢を揺る風の音の峻しさによつて、余の心は容易にかき亂される。之に反し、一年の中最もよく余の心と調子を等しくするのは、春の微かに動き始める頃、吹く風に遠山の雪の冷さを傳へながら、も日の光の肌に親しき頃、ぬくみ始めたる細流のほとりに青きものゝ、漸く芽ぐむ頃である。その時自然の生命の営みは猶半

ば大地の下に行はれて、中に籠る力はたゆたひつゝ、羞ぢらひつゝ、しかも怠るところなき伸張を續けて行く。生命の車は未だ全力を盡して急轉することをせず、前途の遙けさを豫想しつゝ、その靜かに緩かな廻轉を開始する。外に發するよりも内に籠ることを愛する余は、懶惰にして急調の旋轉に堪へざる余は、而も内より温むる力を自覺せずには生き甲斐を感じることを得ざる余は、一年の中、この季節に於て最も自己の本然の姿にあることを感ずるのである。かくて余は晴れたる日は獨り野を行き、岡を行き、春淺き雜木林の下蔭を行きつゝ、頬に冷き風と背に温き日の光とを貪り味はぶ。書を讀みつゝ、夢みるものは旅である。雨に籠りて夢みるものも亦旅である。

余は又早春に當つて、特に幼年の時を回想する。土の下に黒くなつて氷つてゐた雪もいつしか融けて、温かに日の光を吸ふ大地の面の日毎に廣がり行くとき、久しぶりに草履を穿いて外出する喜に溢れつゝ、街道を過る雪解の水の小流れを跨いで獨樂を廻した時分のこと、雪の下に芽を出す笹筍の赤い頭や、蔞の臺の青い頭を捜しまはる心のときめき、遠山の雪を眺めながら、雪解の水の碧く勢よく流れ行く山川のほとりに腰を卸して人生を思つた少年の頃、思へば此等の人生の早春も自分には既に流れ過ぎてしまつたのである。

やがて桃が咲き、櫻が咲き、霞が流れ、又櫻が散る。さうして自然は又余の特愛する第二の季節に——此の度は木々の梢の上にあつて、自然の力が再び籠りつゝ、羞ぢらひつゝ、すくくくと延び

行く晩春初夏の節に——入るのである。(北郊雜記)

二 千客萬來

千客萬來、皆來るとこまるなり。

轉寐の顔へ一冊屋根にふき。

武者一人叱られてゐる土用干。

おさへればすゝきはなせばきりくす。

よつびいてひようと放さぬ案山子かな。

本降になつて出てゆく雨やどり。

泣くくも善い方をとる形見わけ。

名物を食ふが無筆の旅日記。

芭蕉は飛びこみ、道風は飛びあがり。

飛びこみ
古池や蛙飛びこ
む水の音(芭蕉)

釣れますかなどと文王そばへより。

二二 雪前雪後

幸田露伴

幸田露伴
名は成行
文學者
文學博士
慶應三年(五三七)
江戸生

雨も好し、露も好し、霞も、霽も、天より降るもの、面白からぬは無
きが中に、雪はまた特にめでたし。降らんとして未だ降らず、灰
色の雲の、大空を蔽ひて風無き寒さに雀ふくらむ程は兎もあれ
角もあれ、そと下す風に連れて、ちらく、と降出づる始より、檐の
玉水日に耀ふ光、長閑に融けつくすまで、いづれか、をかしからざ
らん。

まづ冬の雪の、粉の如く、球の如く、笹の葉に、牙ゆる音立て、檜の葉
に堅き音立て、板庇にはいたく跳ね返りなどしつゝ、さらく、と
降りたる、見るにも興あり、聞くにも面白し。又春の雪の大きく

軽らかに降りて落つる間もなく色なき水の昔にかへる淡々し

江上午景

山古りて 樹をねて 新

浅みどり 又 深みどり

水光り また 水くもる

露伴漫吟

江上午景
山古りて樹重ね
て新に浅みどり
又深みどり風寝
ねて雲猶あゆみ
水光りまた水く
もる
露伴漫吟

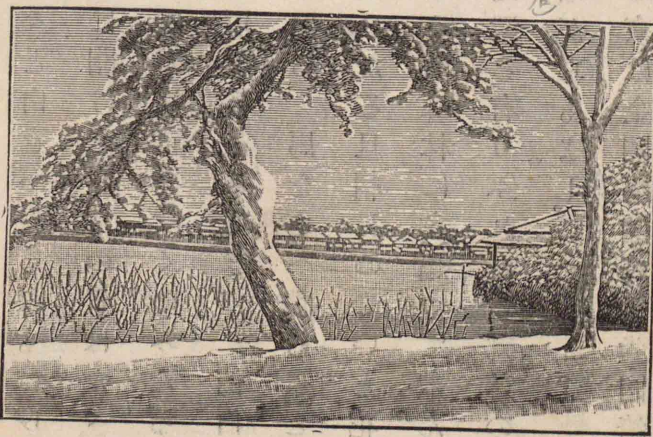
幸田露伴筆蹟
されど降る最中の雪の、見て
美しきは、冬の末かけて春の
初頃の陽氣既に動きて陰氣

雪前雪後

猶いと盛なる時のことなり。寒さ甚だしからねば雪細かなら
ず、暖かさ未だしければ雪は水めかずして恰も好く、且大きく且

山王臺 麴町區にある小丘
 溜池 山王臺の東南麓にあつたが今は埋められて宅地になつた

木曾の寢覺の床の巖は鬼斧に任せて千古冷かに時ち、潭は藍靛を湛へて一脈徐に流る、雪の日の凍れる寂しさに、翠蓋稍重く、壁の簷を戴ける松の村立のあたり、姿をも見せて名をも知らぬ山の禽の餓を鳴きたるなんと二十年の昔の余の胸に鮮かなり。東の京は御溝の水おだやかに、浮寢の禽の夢も安けく、雪に閑かなる大御代の午、また比無くめでたし。山王臺今猶好からんが、溜池の有りし昔いたづらになつかし。不忍の池一望千頃の景はい



不忍の池一望千頃の景はい

冬の不の忍池

待乳山 隅田川の右岸淺草公園に近い丘
 相生橋 深川區越中島から京橋區新佃島に渡した橋
 中島 深川區越中島の一名

は^(ハ)ずも^(ズ)あ^(ア)れ^(レ)石橋の小やかなるを渡つて湖心に至らんとすれば、敗荷の殘莖に一撮の白きものを見たる、これも捨て難き風情あり。暮れて猶暮れ難き雪の闇夜に、何をか物言ふ鴨のさびめきを聞きたる、水に色無く、聲に白さ有りとや云ふべき。隅田川は待乳山を望みたるも好し。山に舞臺あり、臺より望みたるも好し。一條の碧四方の白、實に武藏野を分きて流る、川なりといふべし。相生橋の橋長く、中島の島小なる、取出でて言ふべきにはあらねども、南に涯無き海をすかして海鷗も雪に曇る渺茫たる景色を、欄干の玉を展べ樹立の鷺を宿したるに劃りて一幅の畫としたる、欣ぶべく、賞すべく、此處をこそ今の京には雪の見どころとすべけれ。(洗心録)

兼好法師

俗名吉田兼好
鎌倉室町時代の
文學者

正平五年(1190)
寂
年六十九

仁和寺

京都市の西北郊
御室にある眞言

宗の寺

石清水

男山八幡宮

仁和寺の南五里

極樂寺・高良

共に男山の麓に
ある寺社

二三 仁和寺の法師

兼好法師

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心うく
 覺えて、ある時思ひ立ちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺
 高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて、かたへ
 の人にあひて、年頃思ひつること果し侍りぬ。聞きしにも過ぎ
 て尊くこそおはしけれ。そも参りたる人ごとに山へ登りしは
 何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思
 ひて山までは見ずとぞ言ひける。少しの事にも、先達はあらま
 ほしきことなり。

これも仁和寺の法師、わらはの法師にならんとする名残とて各、
 遊ぶ事ありけるに、酔ひて興に入るあまり、傍なる足鼎を取りて
 頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔を



浮田一憲(華國)筆

入れて舞出でたるに、満座興に入
 ること限なし。

しばし奏でて後、抜かんとするに
 大かた抜かれず。酒宴ことさめ
 て、いかゞはせんと惑ひけり。と
 かくすれば、首のまはりかけて、血
 垂り、たゞはれにはれみちて、息も
 つまりければ、打割らんとすれど、
 たやすく割れず、ひゞきて堪へ難
 かりければ、叶はで、すべきやうな
 くて、三足なる角の上に帷子をう
 ちかけて、手を引き杖をつかせて、

京なるくすしがりゐて行きけり。道すがら人の怪しみ見るこ
と限なし。醫師のもとにさし入りて向ひ居たりけん有様、さこ
そはことやうなりけぬ。物を言ふも、くゞもり聲に響きて聞え
ず。「かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなし」と言へば、又
仁和寺に歸りて、親しきもの、老いたる母など枕がみに寄りゐて
泣悲しめども、聞くらんとも覺えず。

かゝる程に或者のいふやう、たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ば
かりはなどか生きざらん。たゞ力を立て、引きたまへ」とて、藁
のしべをまはりにさし入れて、かねを隔て、首もちぎるばかり
引きたるに、耳鼻缺けうげながら抜けにけり。辛き命まうけて
久しくやみ居たりけり。(徒然草)

廣津和郎

文學者

明治二十四年東

京生

ジャンヴァルジャ

ン

佛國の文豪ユー

ゴアの傑作レ、

ミゼラブル(哀

史)の主人公

二四 僧正と賊

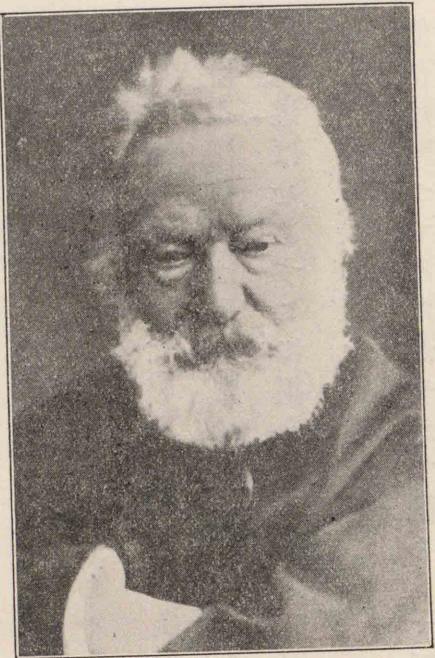
廣津和郎

深い静けさが部屋を充してゐた。部屋の向ふの隅には眠つて
ゐるミリエル僧正の規則正しい、穩かな寢息が聞えた。ジャン、
ヴァルジャンが僧正の寢臺の前に立止つた時、雲は心あるもの
の如く破れて、月光がさつと窓から射し込み、蒼ざめた僧正の寢
顔を明るく照した。その顔は満足と希望と幸福との漠然とし
た表情に輝いてゐた。それは微笑といふよりも、殆ど光輝に近
いものであつた。額には眼に見えぬ光の名状すべからざる反
映が宿つてゐた。眠つてゐる正しき人の魂は、天の幻を見るも
のなのである。僧正の顔には何處となく神々しい處があつた。
無意識の間に現れる莊嚴な處があつた。この輝かしい姿に、ジ
ャン、ヴァルジャンは手に錐を持つたまま、身動きもせず、恐怖に

打たれながら佇んだ。今までこれに較べられるやうな何物も見た事がなかつた。で、老僧から眼を放す事が出来なかつた。ジャン、ヴァルジャンの様子や面には不思議な不決断なものがあつた。謂はゞ今彼は地獄と救との二つの國の間にためらつてゐたのである。この老僧の頭蓋骨を叩き割るか、それともその手に接吻するか、その何れを取るかに迷うてゐたのである。間もなくそろ／＼と左の手を額に當て、帽子を取り、それから同じくそろ／＼と又その手を下して、そしてジャン、ヴァルジャンはじつと瞑想に沈んだ。帽子は左の手に、棍棒は右の手に、恐しい頭には髪の手が逆立つてゐた。此の恐るべき光景の下に、僧正は尙も深き平和の眠をつゞけてゐた。

翌朝未明に僧正が庭を散歩してゐる處に、老女のマグロアール

があわてゝ駈けて來て、



— ゴ — ヌ

「銀の皿の入れてある籠がありませんが、僧正様は御存じですか。」

と訊いた。僧正は「知つてゐる。」

と答へた。丁度花壇

の上に落ちてゐる籠を見つけた處だつたので、それをマグロアールに渡して、

「そら、此處にある。」と云つた。

「けれども中には何も入つて居りませんよ。銀の皿はどうしたのでございませう。」

「あゝ、お前の探してゐるのは皿か。それぢや私は知らぬ。」

「まあ、それでは盗まれたんでございますよ。昨夜來た奴が盗んだんでございますよ。」

さう云つて、マグローアールは狂氣のやうに家の中に駈込んだが、すぐ又駈出して來て、

「僧正様彼奴は居りません。盗まれたんでございますよ。御覽遊ばせ、あすここに扉を乗越えた跡がございます。あゝ憎らしい奴め、銀の皿を盗みやがつた。」

僧正は黙つてゐたが、やがて優しくマグローアールに向つて、

「マグローアールや、私があゝの銀の皿を持つてゐたのは私の間違

バプチスチン
僧正の妹

だつた。あれは貧しい人の所有に屬すべきものだつたのだ。昨夜の男はどうだらう。確かに貧しい人ではないか。」

「そんな事おつしやつても。」

とマグローアールは不服らしく、

「私のためでも、バプチスチン様のためでもなく、あなた様のお爲なんでございますよ。僧正様僧正様はこれから何で御飯を召しあがります。」

僧正はびつくりしたやうな顔をして、

「どうして、錫の皿があるぢやないか。」

「錫は匂がします。」

「よし／＼、それぢや鐵の皿。」

「鐵は味がつきます。」

「よし／＼、それでは木の皿がいゝ。」

朝飯の濟んだ時、不思議な、恐しい群がおとづれて來た。三人の男が一人の男の頸をふん掴まへてゐた。三人の男は憲兵で、一人の男はジャン、ヴァルジャンであつた。

憲兵長が僧正の方へ進み出て、軍隊的の敬禮をして、

「閣下。」

と云つた。この言葉を聞くと共に、ジャン、ヴァルジャンは頭をもたげて、

「閣下だつて、それぢや牧師ぢやないのか。」

とつぶやいた。

「黙れ。」

と一人の憲兵がどなつた。

「このお方は僧正閣下だ。」

「あゝ、又來ましたね。」

と、僧正はジャン、ヴァルジャンに向つて、

「お前さんに會ふのは喜ばしい。だが、私は燭臺も、二百法もする銀の燭臺も、お前さんに上げたはずだつたのに、どうしてあれを皿と一緒に持つて行かなかつたのです。」

ジャン、ヴァルジャンは眼をみはつて、何とも言ひやうのない表情をして僧正を見た。

「閣下。」

と憲兵長が口を挟んで、

「それではこの男の申立はほんたうだつたのでございますな。何だか逃げて行くやうな恰好をして居りましたから、取調べ

るために取押へましたら、銀の皿を持つて居りましたので。」
「それでわざわざ、此處まで引張つて來られたのだね。それは大きな間違ですよ。皿は私がやつたのです。」
と、僧正がいつた。

「さういふ事でございましたら、放免してやりませう。」

憲兵たちは縮みあがつてジャン、ヴァルジャンを放免した。
するとジャン、ヴァルジャンはまるで寢言を云ふやうな、殆ど聞
取れないくらゐの聲で、

「私を許してくれる。ほんたうだらうか。」
とつぶやいた。

「あゝもしく、行きなされる前に、此處にお前さんの燭臺がある。
これも持つてお出でなさい。」

と、僧正は二つの燭臺を取出してジャン、ヴァルジャンに渡した。
ジャン、ヴァルジャンの手足は顫へてゐた。さうして機械的に
それを受取つた。

「それでは靜かに氣をつけてお出で。それから序に言つて置
きますが、今度此處に來る時には庭から來る必要はありませんよ。
いつでも正面の戸口から出入り出来るやうになつて
ゐるからね。あすこは夜でも晝でも一寸懸金で閉めてある
だけだから。」

さう云つて今度は憲兵たちに向ひ、

「どうも御苦勞でした。」

憲兵達は引退つた。ジャン、ヴァルジャンはまるで氣が遠くな
りさうだつた。僧正はその側に近づいて、低い聲で、

「忘れてはなりませんぞ。お前さんは此の銀の皿や燭臺を正直な人間になるために使ふと私に約束した事を、決して忘れてはなりませんぞ。」

ジャン、ヴァルジャンはそんな約束をした覚えはなかつたから面喰つて立つてゐた。

僧正は嚴かに言葉をついで、

「ジャン、ヴァルジャン、私の兄弟、お前さんはもう悪には屬してはゐない、善に屬してゐるのですぞ。さあ私がお前さんの靈を購つたのだ。」

その日の夕方であつた。ダインの町から三里ばかり離れた野原の小徑を、十二ばかりの男の子が、腋の下に絞絃琴を抱へ、背中にモルモットの箱を擔いで、とぼくと歩いてゐた。旅から旅

と渡り歩く子供藝人の一人であつた。何か嬉しさうに歌ひながら歩いて行くが、時々立止つて、恐らくはこの子供の全財産とも覺しき手の中の小錢をばつと空に投上げては、面白さうに又それを受取るのであつた。その小錢の中には四十錢の銀貨が一個あつた。その中ひよつとしたはずみに、その四十錢の銀貨が手から滑り出て、道端の藪の方へ轉がつて行つた。

その藪の木蔭には、前から一人の男が休んでゐたが、銀貨が轉がつて來たのを見ると、足でそれを踏みつけた。けれどそれは殆ど無意識に踏んだのであつた。その男はジャン、ヴァルジャンであつた。子供はそれを見ても少しも恐れる氣色がなく、つかつかとジャン、ヴァルジャンの方へ進んで行つた。全く寂しい場所であつた。眼の届く限、野原にも小徑にも人つ子一人ゐな

かつた。空を高くくとんで行く渡鳥の群が微かに鳴いてゐる外、何の音も聞えなかつた。太陽はその方に背中を向けた子供の髪の毛を金糸のやうに輝かし、ジャン、ヴァルジャンの残忍な顔を蒼白い光に照した。

「小父さん。」

と子供は罪のない顔をして、

「私のお金は。」

「お前の名は何ていふんだ。」

とジャン、ヴァルジャンは云つた。

「プチ、ゼルヴェー！つてんだよ、小父さん。」

「彼方に行け。」

「小父さんてば。」

と子供は云ひつゞけて、

「お金を返しておくれよ。」

それでもジャン、ヴァルジャンが下をじつと向いて黙つて考へてゐるものだから、子供はその頭に掴まつてゆすつた。そして金の上に載つて居る大きな鐵底の靴を動かさうとした。

「私銀貨あたいが欲しいんだよ。四十錢の銀貨が。」

子供は遂に泣出した。

その泣聲にジャン、ヴァル、ジャンは頭を上げた。その顔には當惑したやうな色が浮んだ。で、不思議さうに子供を見てゐたが、やがてステッキの方に手を伸して、恐しい聲で怒鳴つた。

「お前は誰だ。」

「私は小父さんプチ、ゼルヴェーだよ。ねえどうぞ四十錢を返

しておくれ。」

さう云ひかけたが、子供は乍ちに腹を立て、殆ど嚇すやうな調子で、

「さあお足をお退けよ。退けないかい。」

「何だ、まだゐやがる。氣をつけやがれ。」

子供はぞつと恐しくなつて来て、ジャン、ヴァルジャンを見つめたかと思ふと、全身をぶる／＼顫はせて、やがてとつと、逃出した。後も振返らなければ、泣聲も立てなかつた。けれども遠くの方へ行つてから、息が切れたのか、立止つた。ジャン、ヴァルジャンはうつとりした心に、子供のすゝり泣くのを聞いた。が、間もなく子供は往つてしまつた。

太陽は既に沈んでゐた。宵闇がジャン、ヴァルジャンの周圍を

籠めて來た。子供が往つてしまつてからも彼はさうしてじつと立つて、眼の前の地面を見つめてゐた。が、突然ぶるつと顫へた。冷たい寒氣が身にしみたのである。そこで帽子を眼深に冠り、服の襟を合せて、ボタンをかけて、側に置いてあつたステッキを取らうと、二三步進み出ると、自分の足のために半分程地面に埋められて砂利の間に光つてゐる四十錢の銀貨がふと眼についた。

「これはどうした事だ。」

と齒の間で云つた。暫く立つてジャン、ヴァルジャンはその銀貨を拾つて、隠れ場所を求める怯ぢけた鹿のやうに顫へながら、眼を見張つて野原の四方を見渡した。何も見えなかつた。

夜が迫つて來た。野原は寒く寂寞としてゐた。紫の霧が、ちら

ちらする黄昏の中に昇りかけてゐた。

「おゝ。」

と云つてジャン、ヴァルジャンは子供の去つた方へ歩き出した。

「プチ、ゼルヴェー、プチ、ゼルヴェー。」

と聲を限に叫んで見たが、答はなかつた。

「プチ、ゼルヴェー、プチ、ゼルヴェー。」

そして終には駈出した。確かに子供はもう遠くの方へ行つてしまつたに違ひない。

馬に跨つてゐる一人の坊さんに出會つた。

「お坊さん、子供にお逢ひになりませんでしたか。」

と聞くと、

「いゝえ。」

と坊さんは答へた。

「プチ、ゼルヴェー」といふ名の子供なんですが。」

「私は誰にも逢ひませんでした。」

ジャン、ヴァルジャンは袋から五法の貨幣を二つ取出して、それを坊さんに渡して。

「お坊さん、これをどうか貧民に。……十歳ばかりの非常に小さい子供なんです。が、慥かモルモットを持つてゐたと思ひます。それから絞絃琴を。この附近の村の者ではありませんまいか。」

「お話の模様だと、子供はどうも他國の者でせうな。」

ジャン、ヴァルジャンはもう二つ五法の貨幣を出して、

「これをどうか貧民に。」

と坊さんに渡したが、やがて荒々しく附加へて云つた。

「お坊さん、私を捕縛して下さい、私は泥棒です。」
坊さんは馬に拍車を當て、恐れ戦いて逃出した。ジャン、ヴァ
ルジャンは再び初の方向へ駆出した。

「プチ、ゼルヴェー！」

と幾度呼んだか解らない。けれどもその叫び聲は反響さへも
なく霧の中へ消えて行つた。で、最後に又もや子供の名を呼ん
だ時には、聲が噎れて殆ど聞きとれない程であつた。すると不
意に、さながら眼に見えない力に撲たれたやうに、良心の苛責に
堪へかねて、膝ががっくり利かなくなつた。彼は大きな石の上
にぐつたりして倒れた。手は髪の毛を掴み、顔は膝に埋れて、そ
して

「俺は何といふ情ない男だらう。」

と呼んだ。

忽ち胸が塞がつて、わつと泣出した。これは十九年の間、彼が泣
いた最後であつた。彼は泣いた。烈しく泣いた。長い間女よ
りも弱々しく、子供よりも恐れて、泣いてゐた。が、その中不思議
な光が心の中に眼覺めて來た。そして何か知らぬ思が込上
げて來た。これは始めて生れ出た善の輝である。

その夜更けて、ミリエル僧正の戸口の前の敷石に跪いて、祈を捧
げてゐる一人の男があつたのを、通りかゝつた驛馬車の御者が
見たといふ事である。ユーゴー物語

二五 故郷の花

薩摩守忠度と申すは入道の舍弟なり。淀の川尻まで下りける

入道
平清盛
入道して淨海と
いふ

俊成卿
皇太后宮大夫藤原俊成

が、郎等六騎相具して、しのびて都へ歸り上る。如法夜半のことなるに五條三位俊成卿の宿所に行きて門を敲く。内にはこれを聞きけれども、かゝる亂れの世なる上、いぶせき夜半の事なれば、敲けどもくゝあけざりけり。餘りに強く敲きければ、やゝ久しくありて青侍を出し、戸を開かせてこれを問ふ。「忠度と申す者、見參に申し入れたき事ありて參りたり。」と答へければ、三位大庭に下り、世に恐れて内へは入れざりけれども、門をば細めにあけて對面あり。忠度のたまひけるは、「かゝる身として御爲憚あれども、所詮一門榮花盡きて都に安堵せず、西海に落ちくだりて侍り。亡びん事疑なし。世靜まりて後、定めて勅撰の沙汰候はんか。縦ひ身は八重の鹽路の底に沈むとも、藻鹽草かきおく末の言の葉後の世までも朽ちぬ形見に傳はり侍れかしと思ひ出

引合せ
鎧の胸の前と後
とをひきしめあ
はせるところ

前途程遠
大江朝綱の作

でて、川尻よりしのび上りて侍り。これぞ年頃よみ集めたりし愚詠どもにて侍る。身と共に波の下に水屑となさん事遺恨に侍り。これを砌下に進め置き候ふ。勅撰の時は必ず思しめし出でよ。」とて、巻物一卷泣くくゝ鎧の引合せより取出でたり。三位感涙を流してこれを受取り、御詠一卷預り置き候ひをはんぬ。これ永代秀逸の御形見、未來歌仙の指南たらんか。この勿劇の中に御音信に預る事、恐悦少なからず候かな。たとひ浮世を萬里の波に隔つとも、御形見をば一戸の窓にをさめて、勅撰の時、思ひ出で侍るべし。」とのたまへば、忠度、今は身を波の底に沈め、骨を山野に曝すとも思ふことなし。」とて、馬に乗り、古詩を

前途程遠、馳思於雁山之暮雲。
後會期無、霑纓於鴻臚之曉淚。

忍しのぶ摺

ながらの山

長等山
近江國滋賀郡三井寺の西にある

とうちあげく詠じつ、南を指してぞ落ちゆきける。本文には「後會期遙」と書きたるを、忠度還り見るべき旅ならず、今を限の別れなりと思ひければ、後會期無」と詠じけるこそあはれなれ。三位も残りの惜しくして、遙かにこれを見送りても、あはれ世に在りしには、此の人どもにこそ諂ひ追従せしに、かはるならひとて、今は門を隔つることの悲しさよ」と、あはれなるにも涙、優なるにも涙、しのぶの袖をぞ絞られける。世静まりて後、千載集を撰まれけるに、忠度のこの道を嗜み、川尻より上りたりし志を思ひ出で給ひて、故郷の花といふ題に、よみ人知らずとて、一首入れられたり。さゝ波や、志賀の都は荒れにしを、昔ながらの山ざくらかな。

とよめる歌なり。名字をも顯し、數多も入れまほしかりけれども、朝敵となれる人のわざなれば、憚りたまひて、只一首ぞ入れられける。亡魂いかに嬉しく思ひけん。あはれにやさしくぞきこえし。(源平盛衰記)

二六 平安京

藤岡作太郎

日本は世界の樂土なり、東亞の伊太利なり、山川の風景往くところとして佳ならざるなきが中に、殊に衆美を鍾め、群を抜いて立てるを京都とす。京都附近の景は日本のすべての景をエキスにしたるもの、規模の雄大豪壯なるものは存せずといへども、擘麗幽婉の形態は備らざるなし。東に近く比叡如意が嶽より三の峰まで、東山三十六峰笑ふが如く、北には鞍馬・貴船・氷室・鷹が峰

藤岡作太郎
號は東圃
國文學者
文學博士
東京帝國大學文
科大學助教授
石川縣金澤生
明治四十三年歿
年四十一

四明が嶽
比叡山の頂

高尾の山々波濤の如く、西にやゝ隔りて愛宕小倉龜山嵐山松尾より山崎に至りて地勢は窮る。松柏の緑、色濃きなかに、或は目覺むるやうなる櫻の入交るあり、或は紅燃ゆる紅葉を織込みたるあり。一面の草の頂なる四明が嶽、春なほ雪白き比良の遠山などは、わけて朝日夕日に照りはゆる色の千變萬化なるぞ面白き。東の神樂が岡、西の雙が岡は、大和の畝傍香山耳無の三山の如く近く相並びてあらねば、妻争ひの口碑も傳はらねど、子の日の遊に小松引く樂みなど、いづれ劣らぬところから。南にやゝ隔りて男山これに對すれど、國家鎮護の八幡宮、宮柱太知りまして、仰ぐも畏し。

京の東端に沿うて、鴨河の流、糺の河合に高野の支流を集めて、南に珠を碎き去り、西に少し離れて桂川、大堰の激湍に清瀧を併せ

て琴の音涼しく又南に向ふ。

二河南に合し更に淀の急流に流

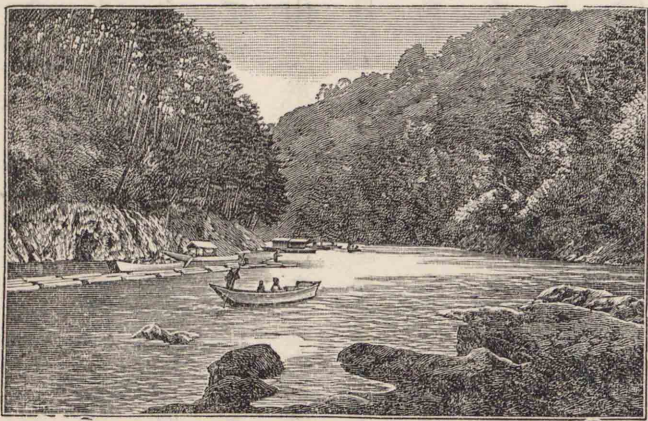
れ込みて、沈々として西の方難波をさして走る。

茫洋たる大海、浩蕩たる波濤の壯觀なく、跌宕の觀念を人心に與ふるものなしといへども、一面より

いへば、山の内に籠りて海を見ざるは、またそれだけの長所なくんばあらず。

地勢の勾配稍急なれば、蘆間に出て入る白帆の、町の側を往來する眺なきかはりに、濁り

て底の明かならざる河水を知らず。京の水はわけてアルカリ



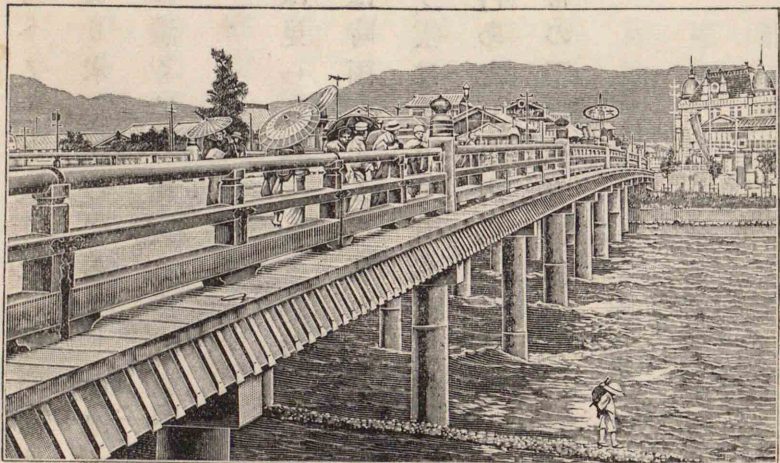
山 嵐

性の鑛物を含めるにや、晒す布をも人の膚をも眞白にす。海そのものは清けれど、棄てたる塵埃を更に岸に打上ぐるに藻の臭も添ひ、漁夫などの居る處は、わけて見るにも嗅ぐにも心地よからぬこと多し。京都に海なきは惜むべしといへども、海なくして清き京都は益、その清さを加ふるなり。

山紫水明の語はよく京都の景色をいひ表せり。何處の山水も日中よりは朝夕の姿態の面白きは、水蒸氣の然らしむる所なるを知らば、三面を山にして土地濕潤、水分を含むこと殊に濃やかなる京都の朝な夕なが、いかに變化に富めるかは、説明を須ひずとも明かなるべし。

嘗て一夏を北陸の海岸に送れることありき。一日驟雨の至るを見る。疾風さと吹き、浪俄かに高く、黒雲奔りて魔の如く、見る

がうちに重なりく、て海を覆ふ。波の音は雲の中にあり、電光閃々、磨る墨の雲間に火花を散らす。波か、雷か。世界はただ一暗黒の中に没し去るか、と疑はれて、凄じかりき。かくの如く壯絶なる景は、わが數年の滯留の中遂に京都にては見ることを得ず。されど下京より吉田に通ひたる朝な、く、の景色は、今に恍惚として眼前にあるを覺ゆ。ひき渡す霞に、三條



三條橋より見たる山

の大橋の擬寶珠の一つく彼方へくと淡くなりて、向ふに寐
たる東山は有るか無きかの夢より未だ覺めやらす。吉田の岡
に並び立てる松は墨繪の刷毛の濃く淡く、花賣る少女の姿は隠
れて、聲ぞまづ朝靄を漏れ來る。

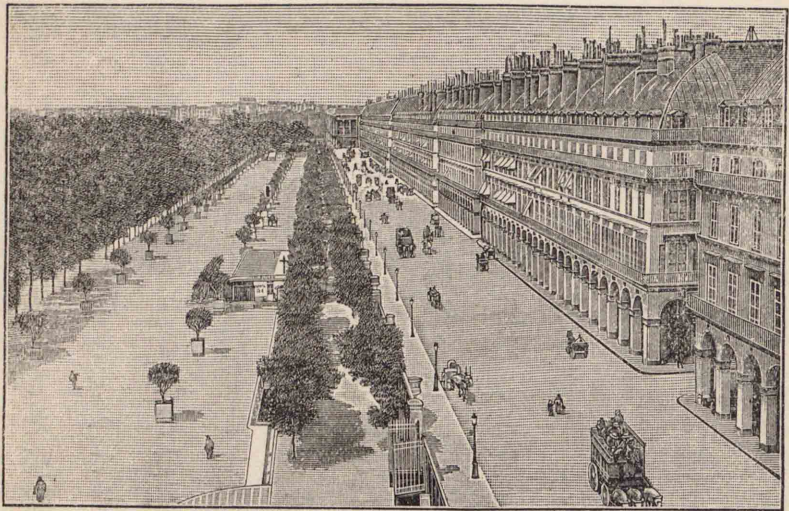
時雨の景色のまたよその國には見られぬ様よ。愛宕の峰を覆
ひて白く光りたる薄布の、さては時雨と思ふうちに、はらくと
面を撲つ、あはやと驚きも果てず、雲は走りて直ちに東山を包み
いつしかそれも霽れて今は山科あたりの山巡りするなるべし
かゝるやさしき景色は、山河襟帶の平安京の特色なり。

(國文學全史)

島崎藤村
名は春樹
詩人
小説家
明治三年長野縣
木曾生

二七 平和の巴里

島崎藤村



凱旋門附近の巴里

都市としての廣さから言へば、
東京の半ばにも及ぶまいとは、
當地へ參らない前から友人の
話で聞いては居りましたが、そ
の代り立體的に積重ねた高敞
な建物には、一家屋にして優に
數十の家族を住まはせ、人口に
於て三百萬を數ふる此の都が、
佛蘭西の諺に言ふ一日で現出
した巴里で無いことは申し上
げるまでも御座いません。け
れども幾多の設計を承継ぎ承

セイヌ
Seine 巴里を貫流
河してゐる大

繼ぎして設計し整理した街路や、建物や、町並木や、公園や、橋梁や、
其の他の工事の跡を考へて見ますと、ある一つの意志に依つて
成つたかと思はれるほど町全體として一つの大きな建築物の
やうな趣を見せて居ります。かういふ點から申せば、巴里は確
かに一つの傑作だと存じます。いかなる旅人でもあの凱旋門
を中心に四方へ續く街路の一つに立つて見るとか、又は一つ一
つの異なる意匠から成立つて居るセイヌ河の橋の一つへ参り
まして、あの兩岸に連なる町々の光景を望んで見るとか致しま
すならば、如何に大きな設計と意匠とが全體として統一を保つ
て居るかを認めない譯にはいかないだらうと存じます。
この古くさびた都に漂ふ空氣の中にはどういふものが流動し、
凝滞すると御考へてせう。あの香の煙で燻り煤けたやうなノ

ノートル、ダム
Notre Dame 巴里にある
有名な寺
十二世紀の
建築が今尚
存してゐる

ノートル、ダムの古塔が聳え立つ町の空に、私はすぐ新式の飛行機
が高く飛揚するのを思ひ出すことが出来ます。何といふ矛盾
でせう、何といふ不調和でせう。私は無數の自動車などが通り
過ぎる廣い滑らかな街路の側で、倒れるまで鞭うたれる荷馬車
の馬を目撃したこともございます。私は又、私の捨てた巻煙草
の吸殻を、しかも私が見て居る前で拾ひ取つて行く極貧しい人
などに幾度となく遭遇したこともございます。こゝには極古
いものと極新しいものとが同棲して居ります。非常に開けた
事と非常に野蠻な感じのする事とが同棲して居ります。舊教
と科學とが同棲して居ります。詩と散文とが同棲して居りま
す。かういふあり餘る程の矛盾を容れながら、全體として見れ
ば、いかにも落着いた好い感じを與へる所が多く、旅人の心を

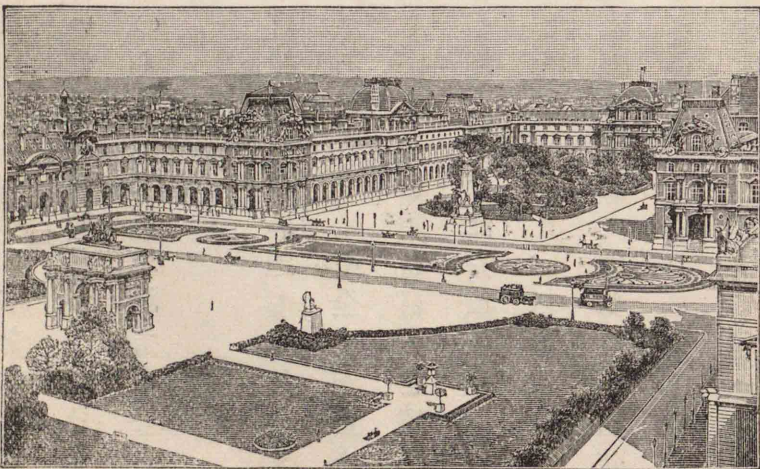
惹くでせうと思ひます。巴里に比べると伯林はあらゆる意味に於て近代的であります。そして、そつくりそのまゝとは言兼ねますが、伯林といふ語を東京といふ語に置きかへることも出来るやうな氣が致します。

日常のことに就いて申しましても、先づ巴里で氣のつくのは貯へて行く生活の姿といふこととでございます。

此の宿の老婦などの日常にすら、いかにも物を大切にし、珍重し、愛玩し、またそれを何等かの方法で活用しようとして居ることが眼につきます。こゝの食堂の壁には左程珍しくもない佛蘭西製の皿がさも大切にしく懸つて居ります。私は宿のおかみさんの眞黒な服を着た胸のあたりに、古い佛蘭西の銀貨を飾につけて居るのを時々見かけます。これは極手近な例を引いた

ルーヴル
 巴里にある
 佛國の舊王
 宮
 今は有名な
 美術品の陳
 列館になつ
 てゐる

に過ぎません。古い銀貨の胸飾が好い趣味であるかどうかなどと問はずに置いて下さい。其の様な物まで役に立つて居るところを考へて見て下さい。私は當地へ參つて見て、極微細なと思はれるやうな物まで廢らず、粗末にされず、しかもそれがごく普通な家に置かれて、特色を發揮したり、生命を保つたりして行くのを見て、かういふ都にルーヴルのやうな美術館



ルーヴル美術館

が出来たのは偶然でないことを知りました。日本を始め、支那、印度、波斯、埃及、其の他の國から古い貴重な美術品が流れ込んで来て、巴里の大商館を飾つて居るのも、決して不思議でないことを知りました。

家屋の多くが石造であることも自然とこれに適して居ります。家屋の一つ一つは皆貯藏庫の趣があります。町全體が藏だと言つても差支ないかも知れません。新奇を競ひ目先を變へることの爲には、以前の白木屋のやうな立派な江戸風な家屋さへどしどしつぶされて行く東京のことに思ひ比べると、この町には實に古い建物までが大切に保存されて、中には三百年も以前の歴史を語つて居るのがございます。それほど價値と形式とが重んぜられて居ります。すべての物がよく貯へられて

白木屋
東京市日本橋區
にある呉服の老
舗

北村透谷
名は門太郎
新體詩家
神奈川県の生
明治二十七年歿
年二十七

居ります。骨董的でなしに鑑賞されて居ります。この町を歩いて居りますと、例へば我が國で申すならば、詩人北村透谷この家に死すといふやうなことが、年號まで書添へられて、その家を飾つて居るのをよく見掛けます。

何といふ風土の相違でせう。夏は廂なしには住まはれないほどの日光を受け、家屋にも樹木にも乃至衣服や皮膚にまでも附着するほどの風塵を浴び、毎年きまつてやつて来る多量な雨と濕氣と出水と多くの昆蟲とのために苦しめられ、冬は一夜にして町々を灰燼に化し去る程の烈しい北風と戦つて、さういふ中で日常の生活を營んで居ることを思ひますと、住居を成るべくあけひろげ大事な物は取片付け、黴びた物は乾し、汚れ易い身體は洗ふやうにして、瀟洒と清潔とを愛するやうになつたのは極

自然なことだらうと存じます。宵越の金は使はないなどと申して貯へることを寧ろ卑しいとした江戸子の贅澤も、さうした風土が産んだものではございますまいか。わが東京をこの巴里に比べて見ますと、私はその間の相違のあまりに懸離れて居るのに驚かずには居られません。こゝには東京で見るやうな日光の強さも輝きも有りません。年百年中、同じ着物で押通して居る人もございます。雨量は少なく、空氣は乾燥して物の黴びるといふことも無く、蟲がつくといふことも有りません。従つて蟲干なども當地には有りません。ひどい風も吹かず、塵も立たず、ですから、労働でもしない限は精々月に一度の入浴でも済ませる譯でございます。

私はこの町全體を藏のやうだと言ひましたが、もう少し詳しく

言つて、大きな乾燥室だと形容して見たいと思ひます。かうした乾燥室の中では戸棚や押入を澤山に造つて物をしまつて置く必要が無い筈です。ありとあらゆる物が出て置ける筈です。色彩と生命とが長く保たれます。

巴里の都が自然の幸を受けることの多い位置にあることは、是までの話で略、想像されようかと存じます。それだけを御話すれば、私は今いかに楽しい月日を送つて居るものゝやうに聞えます。しかし私は旅の身でございます。どうして、そんなに住み憂くない場所が旅にあらう筈はございません。東京のやうな變化の多い處に住慣れた私に取つては、何時の間に夏が過去り、何時の間に秋が來たのか、其の差別のつきかねるやうな當地の氣候が、何となく物足りなく思はれることがござ

います。美しいとは思ひますが、時とするときひ足りないやうな氣も致します。ざあと夕立でも来てくれれば好いなあと思ひ思ひして居るうちに秋が来て、蜻蛉一つ町の空に飛んで來るのを見ないうちに、はや秋は暮れて行きました。大風が吹いて一晩の中に並木が倒れたなどといふ例も無ければ、蟲の爲に損はれる憂も少ないこの土地にあつては、町々の樹木の完全な發育が見られ、幹から梢までその全景を楽しむことが出來ます。そのかはり緑の色が何となく力弱く、灰色がかつて見えます。多少は油蟲などが附着して居ても、もつと精分の強いもつと繁殖力の熾んな故郷の樹木が見たいと思ふ事がございます。雨量は少なく、地震の心配も無い代りに、青空などもどんよりと致して居りまして、明るい、からつとした東京の晴れた空が見たい

と思ふことがございます。月の光もこゝでは淡うございます。黄ばんだ月が、黄昏時になると窓の外にぼんやりと懸つて居るのをよく見かけます。

自分等の性質の中に單調に堪へられないやうな所の有るのは、新陳代謝の激しく行はれる母國の風土から自然と激成されたものかとも思ひます。極靜かに移り變つて行くやうな當地では、月日のたつといふことを、東京ほどに感じません。東京の三個月は、巴里の三箇年にむかふやうな氣が致します。平和の巴里

二八 國民の抱負

大西 祝

世界の文明は之を全體より觀察すれば、年を逐うて進歩し、發展す。而して各國歴史の河流は、遲速の別こそあれ、遂には世界歴

大西祝
哲學者
文學博士
早稻田大學教授
京都帝國大學文
科大學教授
岡山市生
明治三十三年歿
年三十七

史といふ一大海に朝宗する運命を有するなり。唯その世界の文明に力を致すに於て、各國必ずしもその趣を一にせず。往昔猶太人は地上に神の王國を建つるを以てその覺悟とし、希臘人は文藝學術を傳播するを以てその天職とせり。羅馬は世界の帝王を以て自ら任じ、蠻夷の襲撃を受くる曉に於て、猶世界の女王たる位置を保ち、遂に政權を剝奪せらるゝに及んでは、法王政を建て、精神的帝王となり、以て世界に君臨したり。近世の歐米人を見るに、英人は己が運命は海上權を掌握し、遠隔の地に植民をなすにありと信じ、米人はその國土を以てあらゆる方面に自主自由を發達せしむる舞臺となし、獨人は科學及び政治の上より世界に一大寄與をなすを以てその抱負とし、佛人は人間的の思想感情を世界に弘むるを以てその任務とするが如し。

日本は世界の文明に對し如何なる寄與をなすべきか。日本國民は世界に對して如何なる抱負を有すべきか。これ今日の識者先覺が深思熟慮すべき一大問題たり。世界の大事は日本人をして如何なる事を世界に宣傳せしめんとするか。大事は無聲無形なり。識者先覺は大事を悟了し、これをして聲あらしめ形あらしめざるべからず。もし偉大なる先覺ありて、この大事が言はんと欲して言ふ能はざる所を國民に宣傳するあらんか、國民の心は、譬へば塞かれたる水の堰を開かれたる如く、滔々たる大河となりてその進むべき所に流れ行かん。我が輩は一日千秋の思をなして、日本國人の將來に於ける覺悟抱負を宣傳する大指導者の出でんことを希望して已む能はざるなり。然れども、我が輩姑く明治維新時代に立返り、當時の經世憂國の

士が自ら任じたる所を見るときは、その中猶わが國民が今日の覺悟として可なるものあるを發見せずんばあらず。彼等は正義名分を四海に布くを以て日本の抱負とし、權謀術數を去り、至誠世界に立つを以て日本の覺悟とし、一視同仁に天地の大道を體し、天に代りて世界の横道を説破し、討伐し、剿誅し、萬國安全の道を示すを以て日本の天職と考へたるなり。その元氣の壯なる人をして覺えず奮起せしむるものあり。この元氣とこの覺悟とありしが故に、維新の改革は成就して、鎖港攘夷の陋見は打破せられたるなり。維新以來日本が駸々として進歩し、今日の如く多少の力量を有する國となりしは、實にこの元氣と覺悟とありしが故なり。

我が輩は日本人に種々の缺點あるを知る、日本人は猶幾分の修

身を殺して
子曰志士仁人
無求生以害仁、有殺身以成仁。(論語)

練と困難とを經過せざれば決して大國民となる能はざるを知る。然れども、世界中に於て大義名分の爲に熱狂し、忠誠の爲に一身を抛つ事土芥も啻ならざる民ありとせば、何人もまづ指を日本國民に屈せざるを得ざるべし。至誠の極或は輕率の舉動に出で、大事を誤る同胞なきを必せずと雖も、身を殺して仁を成すに於て極めて敏速に、死して悔なきもの、日本人のごときは世界國民中多くあらざる所なり。日本人は道德義務の念に沸騰する國民なりといふとも、誰か然らずといふものあらん。果して然らば、日本が世界の文明に對して寄與すべき最大なるものは道德上の教訓にあらざるか。日本は道德上に於て世界の師表となり、世界より私欲の汜濫を排除する一大任務を有し居るにはあらざるが。日本帝國が開關以來絶海に孤立し、世界の腐

光風館發行
國語教科書

東京高等師範學校教授 吉田彌平編

師範國文

國文教科書

國文教科書

現代文新鈔

近世文新鈔

近古文新鈔

文學博士 高野辰之編

國文讀本

國文讀本

東京高等師範學校教授 保科孝一編

國語教科書

新編國文讀本

東京女子高等師範學校教授 金子彦二郎編

女子現代文學新鈔

女子作文

東京高等師範學校教授 吉田彌平編

太平記鈔本

平家物語新鈔

增鏡鈔本

保元平治物語新鈔

光風館編輯所編

現代文選

徒然草鈔本

常山紀談鈔本

十六夜日記講本

花月草紙鈔

諸星寅一編

徒然草讀本

神皇正統記鈔本

方丈記讀本

訂正一冊

訂正一冊

訂正一冊

訂正一冊

訂正一冊

訂正一冊

訂正一冊

訂正一冊

訂正一冊

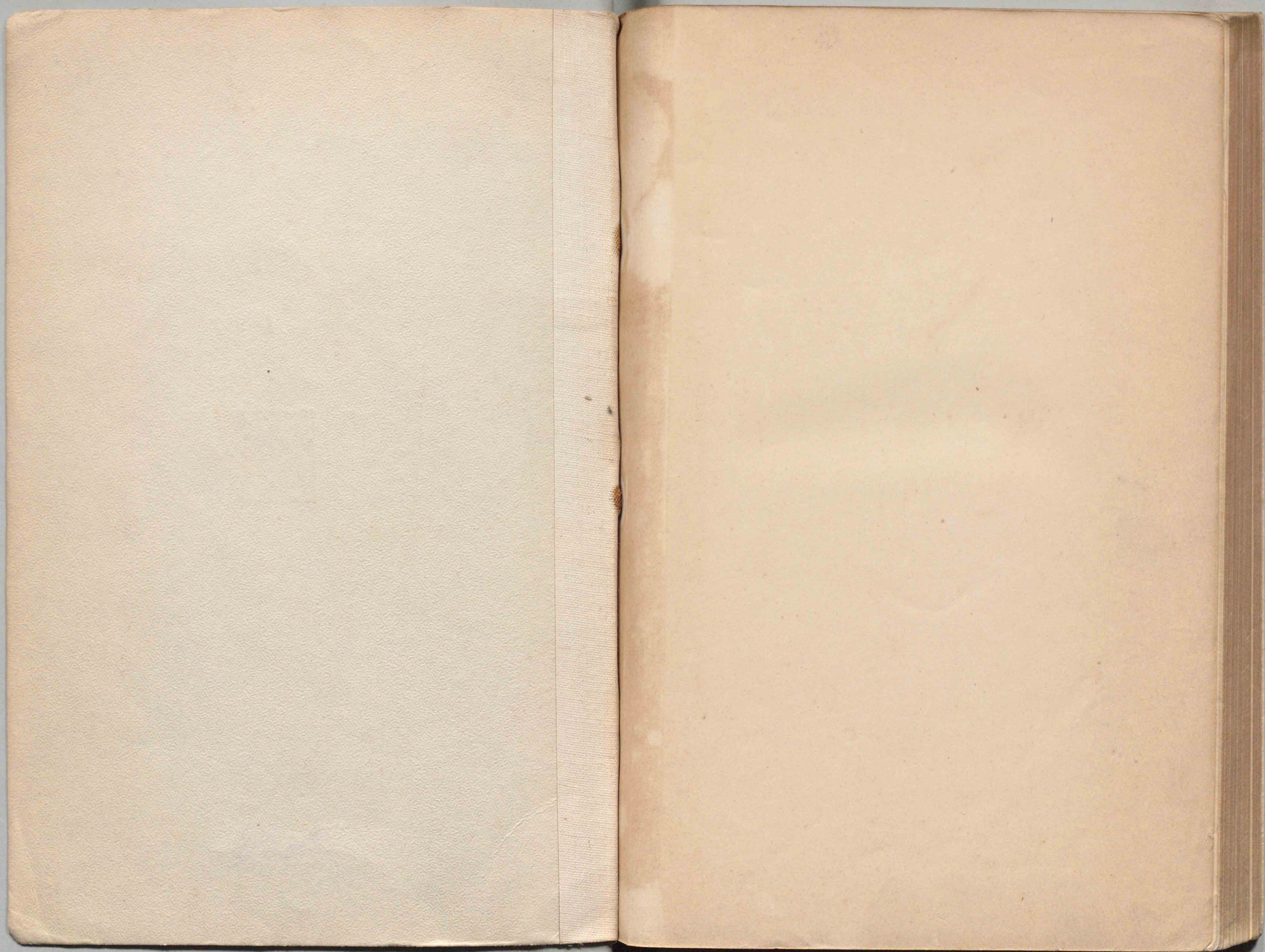
訂正一冊

訂正一冊

訂正一冊

訂正一冊

訂正一冊





広島大学図書

2000023819



庫
6
9